

原著論文

伊東平蔵とその実践的図書館思想

Heizo Ito and His Practical Thoughts about Libraries

吉 田 昭 子
Akiko YOSHIDA

Résumé

Purpose: Heizo Ito (1857-1929) is known in the library community of Japan for his involvement in the establishment of several libraries in the late Meiji and early Showa period while serving as a professor at the Tokyo Foreign Language School. However, there have been very few previous studies on him. The present study examines his personality and also his thoughts about libraries that evolved through hands-on work.

Methods: Published documents and materials used in previous studies were carefully re-examined. In addition, the author surveyed Ito's materials (copies of letters, personal diaries, etc.) held by Yokohama City Central Library and a variety of records stored in the Tokyo Metropolitan Archives. Ito's thoughts about libraries were clarified by analyzing papers published by Ito and other documents.

Results: Ito's life can be divided into seven periods. In the period of constructing a city library in Tokyo, he was associated with its establishment and the management of popular libraries for citizens. Ito made plans for constructing various types of libraries such as private libraries, municipal libraries, and prefectural libraries. While managing these libraries after their construction, he decided it was necessary to strengthen their foundation through systematic training of library staff. During such hands-on activities, his concern gradually changed from setting up many small libraries to building medium- or large-scale libraries according to the size of area served, while maintaining their popularity. He also realized the importance of clarifying the different roles between municipal libraries, prefectural libraries, and city libraries.

- I. はじめに
 - A. 研究の背景
 - B. 研究の目的

吉田昭子：慶應義塾大学非常勤講師

Akiko YOSHIDA: Keio University (part-time lecturer), 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo, JAPAN

e-mail: ayosidal@auone.jp

受付日：2011年12月31日 改訂稿受付日：2012年3月9日 受理日：2012年3月18日

II. 研究方法と研究対象とする情報源

- A. 研究方法と情報源
- B. 横浜市中心図書館所蔵「伊東平蔵関係資料」

III. 伊東平蔵の経歴と図書館史における位置

- A. 伊東平蔵に関する先行研究
- B. 図書館史における位置
- C. 活動の時代区分

IV. 各期の特徴

- A. 第1期 生誕から学生時代
- B. 第2期 東京図書館時代
- C. 第3期 伊学協会と大日本教育会書籍館時代
- D. 第4期 大橋図書館, 日比谷図書館, 宮城県立図書館時代
- E. 第5期 佐賀図書館時代
- F. 第6期 横浜市図書館時代
- G. 第7期 最晩年

V. 伊東平蔵の図書館思想

- A. 伊藤平蔵が経営運営に関わった各図書館
- B. 伊東の図書館に対する考え方
- C. 図書館発展のための基盤形成

VI. おわりに

I. はじめに

A. 研究の背景

伊東平蔵（1857-1929）は、明治期から昭和初期の長期にわたり、日本の図書館の黎明期に活躍し、数々の図書館の設立に携わった。昭和4（1929）年5月の『図書館雑誌』は、“我国図書館界の長老たる前横浜市図書館長伊東平蔵は最近健康を害して静養中であったが遂に去5月2日長逝された。（中略）中央、地方の主要図書館を創設し、各館の今日ある基礎を作られたことは、館界においても類の稀なる功労者であった”¹⁾と彼の死を悼んでいる。

伊東は、東京外国語学校教授をつとめながら、明治から昭和初期の図書館界で活躍し、その名を知られ、大橋図書館、日比谷図書館、宮城県立図書館、佐賀図書館、横浜市図書館等の多くの図書館の設立準備に携わった。しかし、伊東の業績を研究した既存研究は少ない。その中では、伊東平蔵の令孫祐慶貸与の日誌、書簡類を基にその業績

を論じた、竹内愼「先覚者の中の先覚者」²⁾が最も詳しい。そのほか、伊東が設立や運営に携わった各図書館史においてとりあげられているものの、それぞれの図書館の範囲や期間にとどまり、彼の生涯を通じた経歴や図書館思想に対して解明したものはない。竹内論文以外は、二次資料による記述が多く、一次資料による研究は充分に進んでいるとはいえない。

伊東について研究するにあたって、引用される文献は常に限られており、さらなる研究を進めるには、新たな一次資料の活用が必要である。とりわけ、これまでの研究では、公文書類に基づく研究が行われてこなかった。伊東が図書館史において果たした役割を明らかにするには、先行研究がとりあげている資料に加えて、東京都公文書館が所蔵している公文書類等の一次資料もあわせ、さらに研究を深める必要がある。

B. 研究の目的

伊東平蔵は、安政3（1857）年12月に生まれ、

昭和4(1929)年5月に73歳でその生涯を閉じる。江戸末期に生まれ、明治、大正、昭和の激動の時代を生きた人物である。伊東と図書館との関わりは、明治13(1880)年頃から始まり、彼が逝去する昭和4(1929)年まで続く。本研究の目的は、伊東平蔵がどのような経歴の人物なのか、東京市立図書館等の図書館との関わり、果たした役割に着目し、伊東の図書館に関する考え方について考察することにある。

II. 研究方法と研究対象とする情報源

A. 研究方法と情報源

本研究では、先行研究の文献類や伊東が関係した各図書館史類や図書館雑誌等に加え、これまで活用されてこなかった以下にあげる一次資料をとりあげ、文献調査を実施する。研究対象とする情報源は、その存在を確認することができた横浜市中心図書館所蔵伊東平蔵関係資料(以下「伊東平蔵関係資料」)、東京都公文書館と国立公文書館が所蔵する伊東平蔵に関する東京市関係や東京外国語学校関係の履歴書等の一次資料をあわせた文献類である。

B. 横浜市中心図書館所蔵「伊東平蔵関係資料」

伊東平蔵関係の資料を調査する中で、横浜市中心図書館が伊東平蔵関係の資料の複製を所蔵していることが判明した。伊東平蔵の孫にあたる祐慶所有の資料をマイクロフィルムで撮影した複製類である。原資料を16ミリマイクロフィルム1

リールに撮影したものとそのマイクロフィルムから紙に焼き付けた紙焼の2種類がある。

マイクロフィルムによる撮影は、平成5年(1993)年2月に、『横浜の本と文化』³⁾の出版にあたって実施された。既にとりあげた竹内論文²⁾とは別に作成されたものであり、これらが、果たして竹内論文の典拠となった資料と同一かどうかは不明である。『横浜の本と文化』は、横浜市中心図書館開館記念誌として作成された資料で、横浜市図書館設立、運営に貢献した人物として、伊東の業績をとりあげている。同書の別冊⁴⁾[p.11]には、彼の経歴がまとめられている。

「伊東平蔵関係資料」を、内容からみると、「日誌」、「書簡類」、「証明書類」、「その他」の4種類に大別することができる。数量の概略は第1表に示したとおりである。いずれも伊東の業績や考え方を知る上で重要な資料である。以下に、それぞれの資料の内容について述べる。

1. 日誌

残っている日誌^{5), 6)}が綴られた期間は、伊東の最晩年である、昭和3(1928)年から約1年3カ月分である。1年1冊の単位で表紙(写真1)がつけられ、左下に「伊東箕山堂」とある。この「箕山」は伊東の号である。日誌の本文は、ペン字で丹念に綴られ、毎日の出来事、訪問先や面会した人々、その内容等が記録されている。1日の記録の分量は日によって異なるものの、ノートの半ページから、1ページ以上に及ぶ。伊東は昭和

第1表 横浜市中心図書館所蔵「伊東平蔵関係資料」

種 類	内 容	数 量
日 誌	最晩年(昭和4年5月2日逝去する前)の日誌 ・昭和3年分(1/1～12/31) ・昭和4年分(1/1～3/14)	2冊(各年1冊)
書 簡 類	イタリア語翻訳関連と図書館関係で、時期は明治末から大正期の年代が多くみられる。 ・備忘録、書簡封筒を表装したもの ・その他の書簡類(本文や封筒のみも多い)	・備忘録3巻 (収録数: 上36点, 中47点, 下42点) ・その他の書類 (13点)
証明書類	寄留証明書, 大日本教育会会員章贈与証状 伊学協会会員認定書等	協会等機関宛や機関発行の書類
そ の 他	伊東平蔵葬儀の際の今澤慈海弔辞, 親族書上等	

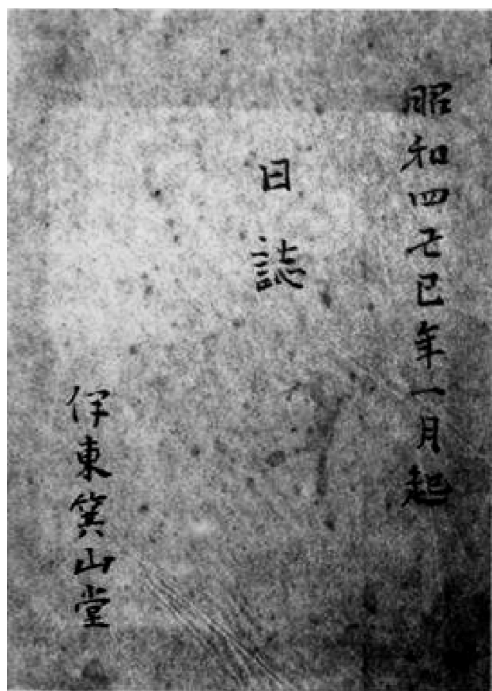


写真1 〔昭和4年〕日誌表紙¹
¹ 伊東平蔵関係資料（横浜市中央図書館所蔵）⁶⁾

3 (1928) 年8月から9月にかけて満州、朝鮮に旅行し、大連、長春、撫順、奉天、平壤の図書館を精力的に訪問している。日誌には、各図書館の建物の配置や蔵書数、サービスの特徴等が丹念に綴られており、彼の図書館建築に対する関心が強いものであったことが窺える。

写真2は昭和4(1929)年1月1日の部分である。この時期になると、既に例年と違って体調が悪いと書き始めており、体調は日を追って悪化していく。次第に1日数行だけしか記すことができない日々が続くようになる。内容的にも、図書館関係のことや日々の出来事よりも、自分自身の健康と体調の悪化に関することが中心に記述されるようになる。そして、昭和4(1929)年3月14日を最後に日誌への記載は中断されている。その後、伊東は昭和4(1929)年5月2日に死去している。まさに最晩年の記録といえることができる。

伊東の日誌の内容をみると、図書館に関連した記述がきわめて詳細に記されていることが分か

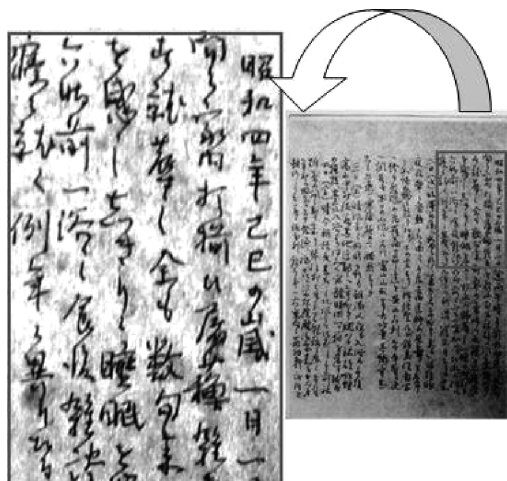


写真2 〔昭和4年〕日誌本文（昭和4年1月1日）と拡大¹

¹ 伊東平蔵関係資料（横浜市中央図書館所蔵）⁶⁾

る。このことから判断すると、彼がその生涯を通して、各年代で克明な日誌を記していたことが考えられる。しかし、残念ながら「伊東平蔵関係資料」に残され、内容を確認できるのは最晩年の日誌のみに限られている。

2. 書簡類

書簡類は、備忘録⁷⁾とその他の書簡に分けられる。備忘録は書簡類を巻物形式に表装したもので、上(写真3)、中、下の3巻で構成されている。書簡は、上巻に36点、中巻に47点、下巻に42点が収録されている。巻頭部分(写真4)には、書簡のやり取りが行われていた人々の氏名と肩書が列記されている。宛先は広範囲にわたり、文部次官で男爵の辻新次(1842-1915)、帝国大学教授で法学者の穂積陳重(1856-1926)、博文館で出版や著述に携わり、東京市議会議員でもあった坪谷善四郎(1862-1949)など、図書館関係者等の名前が含まれている。巻物の巻頭部分の紙片は、表装後に貼付されたと考えられ、レポート用紙にペン書きで記されている。備忘録以外の表装されていない書簡にも「父伊東平蔵大人欧州留学中の書簡」のように内容を説明した紙片が含まれていることを考え合わせると、家族が整理した時



写真3 備忘録(上)¹

¹ 伊東平蔵関係資料(横浜市中央図書館所蔵)⁷⁾

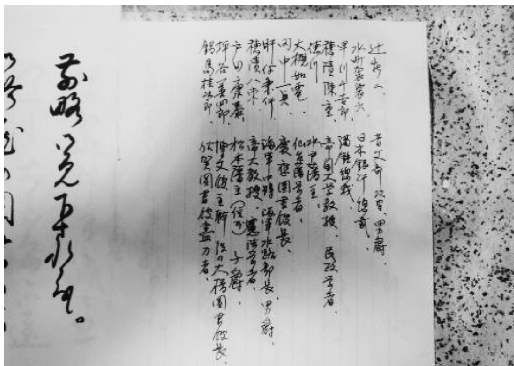


写真4 備忘録巻頭¹

¹ 伊東平蔵関係資料(横浜市中央図書館所蔵)⁷⁾

に添えた説明書と考えられる。

書簡類は明治末から大正期にかけての年代のものが多く見られ、内容的にはイタリア語翻訳関係や図書館関係の書簡が多い。その他の表装されていない書簡類には、本文や封筒のみのものも見られる。封筒が残っているものは、消印等から日付が特定できるものもあるが、本文だけで内容と他資料を引き比べないと年代が特定できないものも多い。宛先や差出人が見られず、年月のみのもの



写真5 大日本教育会會員章贈与證狀¹

¹ 伊東平蔵関係資料(横浜市中央図書館所蔵)⁸⁾

は、内容等による年代の照合と特定が必要である。

3. 証明書類

寄留証明書、伊東が関わった団体が発行した協会会員認定証書が残されている。たとえば大日本教育会會員章贈与證狀⁸⁾(写真5)の場合は、明治23(1890)年5月24日に伊東に対して会員章が与えられたことがわかる。その他、伊学協会会員認定書のように、伊学協会通常会員の認定書等も見られ、伊東がいつごろ、どんな団体や協会に属して活動していたか等を知る上で重要な手がかりとなる資料類である。

4. その他

その他にも、伊東に関する私生活に関わる文書類が見られる。たとえば、伊東の葬儀の際の弔辞⁹⁾(写真6)が残されている。昭和4(1929)年5月3日の朝日新聞に掲載された死亡広告¹⁰⁾によると、伊東は同年5月2日午前1時に死去した。彼の葬儀は5月4日午後1時から3時まで、青山斎場において仏式で行われている。喪主は嗣子伊東祐雄、親戚総代山内福松、友人総代は栗田三吾と今澤慈海(1882-1968)であった。同年5月5日の朝日新聞¹¹⁾には、喪主による会葬御礼の広告が掲載されている。友人代表である栗田三吾は『伊太利亜語入門』¹²⁾等の著作を著わし、東京外



写真6 伊東平蔵葬儀の弔辞¹

¹ 伊東平蔵関係資料（横浜市中心図書館所蔵）⁹⁾

国語学校の伊語学科教授を務めた人物である。今澤慈海は日比谷図書館頭、すなわち館長として知られている。そして、今澤は弔辞⁹⁾の中で、伊東の業績と人柄について次のように述べている。

前東京市図書館主事 伊東平蔵君病ヲ以テ逝ク嗚呼悲哉 君資性温厚ニシテ宏懐言行亦恭敬ニシテ悉ク至誠ヲ発ス 夙ニ斯業ニ従ヒソノ発展ニ淬励スルコト多年ナリ日比谷図書館ニ入りテハソノ創設ノ枢務ニ参画シ規構ヲ整フニ意ヲ注ク不肖後ヲ享ケテソノ職ヲ汚シ今日ノ隆盛ヲ観ル ミナ 君ノ力ニ負フ所多シ而シテ今ヤ君逝ク悲痛哀悼何ソ勝ヘム茲ニ謹ンテ君カ英霊ヲ吊ス
昭和四年五月四日 東京市立日比谷図書館頭 今澤慈海⁹⁾

この弔辞を通して、今澤慈海が日比谷図書館館頭として、東京市立日比谷図書館創立時に伊東が果たした役割やその後の東京市立図書館隆盛の基盤を築いた功績を高く評価していたことがわかる。

III. 伊東平蔵の経歴と図書館史における位置

A. 伊東平蔵に関する先行研究

伊東の経歴について調べるにあたって、人名事典類では『海を越えた日本人名事典』¹³⁾に、最も詳細な記述が載っている。この事典に採録されたのは、伊東が明治19年(1886)にイタリアに渡航し、語学留学しているためである。参考文献として、『神奈川県図書館史』¹⁴⁾や『図書館雑

誌』の記事や第I章A節でもとりあげた竹内愆の「先覚者の中の先覚者」²⁾等が挙げられている。

竹内愆の「先覚者の中の先覚者」²⁾は、先行研究の中では、最も詳しく伊東の経歴について言及している文献である。竹内は、『神奈川県図書館史』¹⁴⁾や『佐賀県立図書館六十年のあゆみ』¹⁵⁾、図書館雑誌等のほか、伊東平蔵の令孫祐慶賞与の日誌、書簡類を基に、その業績をまとめている。竹内は、図書館と伊東との関わりについて、特に昭和2年(1927)の全国図書館大会における「府県立図書館と大都市の市立図書館とは、将来其機能を明確に区別する必要なきか」と提案している点を重視し、伊東の先見性と業績を高く評価している。図書館生活38年のうち勤務した図書館が6館、創設時から館長又は主事として運営にあたったのが4館、このほかに福岡県立図書館の館舎の設立にも関わったとしている。

石山洋は「生涯四度図書館を創った男—伊東平蔵—」¹⁶⁾で、竹内論文において伊東の図書館示論事項起草の趣旨を利用者中心に徹していたと評価している点に批判を加えている。石山は、図書館員ならば一度は最初から自分で図書館を創業したいという夢を持つとして、それを4度果たした人物として伊東をとりあげている。そして、留学やその後の研究を通して学びとった彼の手法は、現代に通じる合理的かつ組織的なものであると評価している。

伊東自身が自らをあちこちに卵を生みつけるアヒル館長¹⁷⁾と述べているように、それぞれの図書館における在任期間は比較的短い。そのため、彼が設立や運営に関わった各図書館の館史における記述も、各図書館における在任期間の業績が中

心となっている。『神奈川県図書館史』¹⁴⁾に引用されている伊東の墓誌「箕山府君墓誌」の文中には、“経営図書館鋭意努力大橋日比谷横浜仙台佐賀図書館及巡回文庫等皆出其考案資性勤厚学問該博兼好音曲歌舞”とあり、彼が多くの図書館の経営に関わったこと、さらに、多彩な趣味を持つ人物であったことが窺える。このほか、『阿波洋学史の研究』¹⁸⁾の中で、伊東は明治期に留学して、早くから洋学を学んだ徳島の出身者の一人として紹介されている。

B. 図書館史における位置

昭和16(1941)年に、日本図書館協会50周年記念として「図書館人を偲ぶ座談会」¹⁹⁾が開催された。図書館雑誌編集部主催のこの座談会の出席者は、市島謙吉(1860-1944)、今澤慈海、橋井清五郎(1876-1947)、幸田成友(1873-1954)、坪谷善四郎、横尾勇之助であった。この座談会は、我が国の図書館界のために、特に協会のために働いた人々を偲び開催された。座談会の席上で、坪谷は「古い人だが大切な人」として、伊東平蔵をとりあげている。坪谷は大橋図書館の主事の人選に際して、田中稲城(1856-1925)に相談して伊東を紹介されたと述べている。そして、坪谷は伊東について大橋図書館を設計し、その後日比谷図書館等を造った人物であり、日本の図書館の黎明期における第一の先覚者であると高く評価している。

私立の大橋図書館は、東京に市立図書館がなかった時代に、東京市内の公共図書館の空白を埋めただけではなく、東京市の図書館経営において大きな影響を与えたとされる図書館である²⁰⁾。明治、大正、昭和にわたり図書館史上に残る活動をした公共図書館としてその名を知られている。東京市立日比谷図書館も児童サービス²¹⁾やレファレンスサービス²²⁾等で先進的なサービスを展開し、日本の公共図書館に定着させた図書館として、その活動が高く評価されている図書館である。伊東はこれらの日本の公共図書館に大きな影響を与えた2つの図書館の設立に関わり重要な役割を果たしたとされる人物なのである。

伊東の業績の概略と図書館界の動向を示すために、伊東の経歴に関する略年表を、付録1として示した。さらに、伊東が設立や運営に関わった当時の5つの図書館の蔵書、サービス、建物等の状況を、付録2で比較した。

C. 活動の時代区分

伊東平蔵の明治末から昭和4(1929)年5月2日までの生涯をその活動内容に基づいて、第1期から第7期の7つの時期に分けた。各時期の主な活動内容と期間、年齢を第2表に示した。

第1期は伊東の生誕から学生時代まで、第2期は文部省に採用され、東京図書館を兼務する時期にあたる。伊東の図書館との関わりが始まるのは、第2期の文部省に入り、東京図書館兼務、さ

第2表 伊東平蔵の活動の時代区分

時 期	主な活動内容	期 間	年 齢
第1期	生誕から学生時代	安政3～明治12年	生誕～
第2期	文部省勤務、東京図書館兼務、「図書館示論事項」起草、イタリア留学時代	明治13～22年	24歳～
第3期	イタリア語翻訳、伊学協会、大日本教育会書籍館時代	明治23～32年	34歳～
第4期	東京外国語学校教授、大橋図書館主事、日比谷図書館準備主事、宮城県立図書館調査報告作成の時代	明治33～45年	44歳～
第5期	佐賀図書館時代	大正2～9年	57歳～
第6期	横浜市図書館時代	大正10～昭和元年	65歳～
第7期	最晩年 神奈川県指導員時代	昭和2～4年	71歳～73歳

らに「図書館示論」の起草に関わる時期である。この時期にイタリアに私費で留学して帰国する。第3期からは、留学で学んだイタリア語を生かして翻訳や伊学協会での図書の出版、大日本教育会書籍館で活躍するようになる。第4期には東京外国語学校の伊語学科教授に就任し、同時に大橋図書館主事や日比谷図書館の準備主事として、図書館業務にも関わり、その他にも、宮城県立図書館調査報告も作成している。彼の図書館界での活躍は、東京だけではなく、全国的な範囲に広がりを見せるようになる。第5期では、私立の佐賀図書館創立委員を委嘱され、東京外国語学校教授を退職して、図書館を中心とした活動に入る。第6期では横浜市図書館の設立運営に携わり、引退後も第7期では神奈川県への指導員を務めるなど、最晩年まで図書館振興のために力を注いだ。このように伊東と図書館との関わりは、24歳から73歳までにわたり、およそ半世紀に及んでいる。第IV章では、この7期について、それぞれの特徴について述べる。

IV. 各期の特徴

A. 第1期 生誕から学生時代

伊東平蔵は、東京都公文書館に残されている履歴書²³⁾によれば、安政3年12月21日に生まれている。安政3年の12月1日が西暦1856年12月27日にあたるために、西暦に換算すると伊東は1857年に出生したことになる。彼は、阿波藩士山内俊一の第三男として生まれ、後に同藩伊東八郎左衛門の養子となり、伊東姓となった。「伊東平蔵関係資料」には、父方の山内家と母方の親族書上や東京への寄留証明書が残っている。壬申すなわち明治5(1872)年4月付の淡路国士族伊東平蔵の寄留証明書が残されており、文学修行のために東京に寄留と記されており、明治6(1873)年8月付の親族の書上も残されている。

伊東は明治7(1874)年には、旧東京外国語学校でフランス語を学んでいる。東京外国語学校は、明治6(1873)年に開成学校から分かれて発足した。当時は伊語学科がなく、副科目でもなかった。『東京外国語学校沿革』²⁴⁾[p. 67]の東京

外国語学校官員並生徒一覧(明治7年3月)には、仏語学下等第1級に、“名東 官費 伊東平蔵”とあり学校長には辻新次の名前が見られる。『東京外国語学校史』²⁵⁾は、伊東が留学する前にイタリア語を学んだかどうかについての記録はないものの、イタリア関係の仕事に携わった人たちが実際に伊国人と接触することでイタリア語を習得した可能性が考えられるとしている。

B. 第2期 東京図書館時代

第2期は、伊東が東京外国語学校で学んだ後に、文部省や東京図書館勤務時代の文部省示論事項の起草に携わり、イタリアに私費で留学した時期にあたる。

1. 「図書館示論事項」の起草と東京図書館兼務

東京都公文書館が所蔵する、明治41(1908)年5月に伊東が日比谷図書館を依願退職した時に提出した履歴書²³⁾の最初の記述は、明治13(1880)年9月3日に文部八等属報告局勤務に始まる。この頃の伊東は、報告局において東京外国語学校で学んだ語学を生かして、文部省発行の『教育雑誌』の海外情報の翻訳業務に携わっている。『明治前期文部省刊行雑誌総目録』²⁶⁾に収載された目次によると、伊東平蔵名での翻訳記事は、『教育雑誌』87号(明治12年1月17日)の仏人シャルボノウ氏教育論抄「教育二三個ノ目的有ルノ論」から、『文部省教育雑誌』171号(明治15年12月27日)の仏国教員功程鈔「村学校ノ農学教授編制方ヲ論ズ」まで、4年間にわたる35篇である。国別では、フランスに関する記事が29篇とほとんどを占め、ベルギーに関する記事が5篇、イタリアに関する記事は1篇である。イタリアに関する記事は、127号(明治13年8月16日)の伊太利教育報告書抄「伊国中学技芸教育ノ景況」のみである。題名からみると各国の教育論や教育事情に関するもので、図書館に関係するものは見られない。

そして、明治15(1882)年3月には文部七等属、同年4月に専門学務局兼勤となる。伊東は文部省示論事項のうち、「書籍館」の部分の起草を

担当している²⁷⁾。文部省示諭事項とは、明治15(1882)年11月から12月にかけて、全国各府県の学務課長等を召集して開催した学事諮問会で配布された資料である。文部省の各局課長あるいは主務吏員が、府県が担当すべき教育諸般の事項に関する基本方針を説明することを目的として作成された。この資料の内容は大きく13項目に分かれ、このうちの第8番目に「書籍館」に関する事項が10ページにわたって記され、図書館に関わることは、社会教育関係の唯一の柱として、取り上げられている²⁸⁾。

文部省示諭事項では、書籍館の意義は「専門研究者の研究上の便宜提供」、「学生の学習援助」、「業暇読書の念のある庶民への読書機会の提供」の3点からとらえられている。書籍館については、「遠大該博」の目的を持つものではなく、「諸科の図書を収集し、学士著述者等の参考に便するもの」、「通俗近易の図書を備存し、庶民に閲覧せしめ、読書修学を下流の人民に配与する」、「学校に於いて教育上の有用の図書を収集して教員生徒の参観に便し、生徒の日常教課に疲労した者の精神を癒すもの」など、多様なタイプのものを地域状況に応じて設置すべきであるとしている。さらに、書籍館を計画する際の最重要要件として、蔵書の選択(善良の書籍の選択と不良な書籍の排棄)をとりあげている。その他、蔵書目録の編成、蔵書室及び閲覧室の設備、開館時期(来観者の便を考えた開館、夜間開館)、蔵書の処置(捷速な出納の必要等)などの来館者の利便性を重視した内容も見られる。

伊東の履歴書によると、明治18(1885)年11月に学務二局詰、同年12月11日に東京図書館兼務となる。明治19(1886)年3月4日には、伊東は文部六等属、非職申付となっている。明治19(1886)年以後はイタリアに留学している期間にあたる。イタリア留学については私費留学のためか、履歴書には書かれていない。続く記載事項は、明治22(1889)年3月4日の“任文部属叙判任官六等/専門学務局詰/東京図書館兼務ヲ命ス”となっている。

明治18(1885)年2月9日に、文部省はそれ

までの11局から6局体制に改められ、学務二局長に辻新次が就任している²⁹⁾。それぞれの業務内容としては、報告局は報告統計及び教育に関する通信博覧会に係る事務、学務二局は中学校、小学校、幼稚園、師範学校、女学校、各種学校及び書籍館・博物館、盲啞院に関する事務を掌った。同年2月13日に学務二局は5課5地方部に分かれ、書籍館は第4課の所管となっている。

なお、明治20(1887)年12月の『文部省職員録』には非職の項目³⁰⁾[p.90]の中に伊東平蔵の名前が見られ、明治23(1890)年7月³¹⁾[p.133]では、判任官文部属になっている。

2. イタリア留学と帰国

伊東は、明治19(1886)年にイタリアに留学する。横浜市中心図書館に残る同年6月8日付の伊東平蔵が母にあてた書簡によると、パリで二位様に拝謁し、学費援助を受けることができた、二位様から1カ月50円の援助を1年間にわたって受け、帰朝後返納することになり、明日にはイタリアへ出立する予定であると報告している。ここで伊東の書簡中に見られる二位様とは、蜂須賀茂韶(1846-1918)と考えられる。

蜂須賀は明治元(1868)年、父のあとを受けて阿波国徳島藩主になり、従二位に昇叙した。彼はイギリスに渡り、オックスフォード大学に留学している。明治19(1886)年当時は、駐フランス国特命全権公使であり、帰国後は東京府知事や貴族院議長を歴任した人物である³²⁾。出身が阿波藩である伊東は、パリでフランス国特命全権公使の蜂須賀茂韶に学費を借用したのである。「伊東平蔵関係資料」によると、このときにフランスで得た学費に対する初度返金の領収書(蜂須賀家明治28年7月12日付)が残されており、伊東が約束どおりに、帰国後に返済を開始したことがわかる。

『大橋図書館四十年史』³³⁾では、伊東はイタリアに留学の傍ら彼国の図書館について研究し、帰朝後、我が国にも図書館を設立すべきことを文部大臣に建議したことがあるとしている。しかし、図書館関係の研究の中では伊東のイタリア留学関

連の事柄やこの間の状況は必ずしも明らかにされてはこなかった。伊東のこの時期の活動については、日伊の美術交流史の研究からたどることができる。

『ヴェネツィアと日本』³⁴⁾によると、伊東は明治20(1887)年からヴェネツィア商業高等学校の日本語教師を担当するようになる。ヴェネツィア商業高等学校は、現在のヴェネツィア大学(Università Ca' Foscari di Venezia)の前身にあたる。この学校の開設は、明治2(1869)年のスエズ運河開設を契機としてヴェネツィアが地中海世界の制覇奪回を目指した動きの1つとされる。ヴェネツィア商業高等学校は、商業学科、師範養成学科、領事養成学科の3学科で構成され、東洋諸語は師範養成学科、領事養成学科の自由選択外国語として位置づけられ、いずれも夜学であった。

この学校には、明治6(1873)年から明治42(1909)年までに、6名の日本人教師が赴任しており、伊東は第5代目にあたる。初代(明治6～9年)は、東京出身の外交官である吉田要作(1851-1927)、第2代(明治9～11年)は大阪の蘭学者・医者緒方洪庵の第十子でウィーン万国博覧会の事務政府事務官等を務め、教師でもあった緒方惟直(1853-1878)、第3代(明治11～14年)は画家の川村清雄(1852-1934)、第4代(明治14～20年)は彫刻家で後に東京美術学校彫刻家教授となる長沼守敬(1857-1942)であった。そして、第5代(明治20～21年)が、伊東平蔵である。しかし、この講座は明治21(1888)年には資金不足で中断され、明治41(1908)年に1年間のみ再開され、第6代(明治41～42年)として画家の寺崎武男(1883-1967)が担当した。

国立公文書館所蔵の東京外国語学校教授依願免官公文書(大正2年3月26日付)の伊東平蔵辞表³⁵⁾によると、伊東の辞職の原因は持病の慢性腎臓炎症の悪化となっている。この辞表には医師による診断書が付されており、明治22(1889)年1月頃にイタリアで慢性腎臓炎症に罹り、帰朝して帝国大学の病院に入院し治療を加えた。厳寒の頃に静岡病院に転院して、明治26(1893)年

頃に全治したとある。なお、「伊東平蔵関係資料」には、伊東の父から静岡市公立病院入院中の伊東に宛てた見舞状が残っており、その日付は明治23(1890)年12月14日になっている。日比谷図書館で行われた「廿年前に於ける我が國圖書館事業を顧みて」¹⁷⁾と題した講演会の中で、彼は明治26(1893)年病を得て西洋から帰国し、かなり長く患っていたと話している。履歴書や書簡類の記述をあわせると伊東が帰国したのは、明治22(1889)年と考えられる。

伊東の直前に第4代の日本語教師を担当していた長沼は、「現代美術の揺籃時代」³⁶⁾の中で、この日本語の授業の生徒は5から6名で、1週に3度の夜学として経営されていたと回想している。ヴェネツィアで日本語教師に携わった人々は、外交官や画家、彫刻家たちであり、特に図書館に関係した人物はみられない。この頃の伊東は、蜂須賀公使からの学資援助と夜間の日本語教師で得た収入で生活し、昼間は自らの勉学の時間にあてていたものと考えられる。

伊東は留学時代の図書館利用経験について、昭和3(1928)年に日比谷図書館で行われた「廿年前に於ける我が國圖書館事業を顧みて」¹⁷⁾の講演会の中で言及し、パリの学生町に間借をしていた頃には、近くのオデオン公園の区役所の2階にあった図書館を図書購入のための下調べに利用したことやヴェニスではチシアン³⁷⁾の画のある図書館があり、閲覧者の要求に応じて係員が本を出してくれ便利だったと語っている。

イタリアへの留学目的について、伊東はこの講演のなかでも言及していない。伊東が帰国してから明治25(1892)年に出版した著書が、後述する『伊國信用組合』³⁸⁾であることと、19世紀中葉以後の日伊関係において商業が重要な位置を占めていたこと³⁹⁾をあわせると、イタリア留学中の伊東の関心は、イタリアの商業関係にあったと考えられる。

しかし、一方で伊東は明治36(1903)年に十有余年前の資料だが有用な資料であるとして、『図書世界』に「伊國圖書館令」^{40)~42)}の条文を翻訳して紹介(翌年には都合により休載⁴³⁾)して

いる。このことから、留学中もイタリアの図書館状況^{44), 45)}に対する関心は高かったことが窺える⁴⁶⁾。

C. 第3期 伊学協会と大日本教育会書籍館時代

イタリアから帰国した伊東は、イタリア語を生かして翻訳関係の仕事に携わる。東京外国語学校の講師に就任し、私生活では依田学海（1833-1909）の二女と結婚する時期にあたる。

1. 伊学協会、大日本教育会書籍館での活動

「伊東平蔵関係資料」に残る伊学協会通常委員認定証によると、伊東は明治21（1888）年12月に伊学協会通常会員に認定されている。また、大日本教育会会員章贈与証状（写真5）からは、明治23年5月24日付で伊東に大日本教育会の会員章が与えられたことがわかる。そして、明治21（1888）年9月刊行『大日本教育会雑誌』の号外⁴⁷⁾では、東京府会員の21番に既に“京橋区南紺屋町七番地 伊東平蔵”として名簿に記載されている。

伊東は、この頃、明治25（1892）年4月に東京伊学協会から『伊國信用組合』³⁸⁾を刊行している。この図書には、辻新次伊学協会長とエレ・ド・マルチャーノ伊国全権特命公使による序文が見られる。伊東は自序で、第2期の帝国議会に提出された信用組合法は成立しなかったが、信用組合は庶民の金融を円滑にし、国の生産力を高めるためにも重要なので、イタリアに留学した際に見聞した状況について取り上げることにしたと出版動機について述べている。奥付には、“著者兼発行者／東京市本郷区金助町十三番地／伊東平蔵”と記載されている。『伊学協会日誌』⁴⁸⁾によれば、明治25（1892）年の伊学協会事務所は東京市本郷区金助町13番地伊東平蔵であったと記されており、東京伊学協会の事務は伊東の自宅で行われていたことがわかる。さらに、明治26（1893）年9月15日の記述によると、伊学協会文庫は大日本教育会所蔵の図書及びボアソナード博士（1825-1910）の法律書、大日本仏教図書館の仏書等とともに大日本教育会書籍館で日々午前9時から

午後5時まで一般の閲覧に供されるようになったとある。

大日本教育会の書籍館は、明治20（1887）年3月に神田一ツ橋に教育及び学術に関する通俗の図書、雑誌、報告書等を収集して、広く公衆の閲覧に供することを目的として設立された⁴⁹⁾。東京における私立図書館の第1号として約20,000冊の蔵書を有し、その中には辻新次が所蔵していた和漢洋書1,346冊も含まれていたという⁵⁰⁾。辻は伊東が文部省に勤務していた時代には学務二局長を務めており、この時期には伊学協会の会長でもあった。穂積重行は「『伊学協会』をめぐる」⁵¹⁾の中で、伊東について初期あるいは最初からの伊学協会の書記の一人であったとしている。

明治22（1889）年3月に、文部省が大日本教育会に「諭示」し、東京図書館（帝国図書館の前身）を参考図書館とし、その蔵書中の通俗にわたるものを大日本教育会書籍館に貸与する方針が定められた。これにより大日本教育会書籍館は東京図書館から借り受けた和漢書14,760冊を加え、同年7月に神田区柳原河岸に移転し、開館式が行われた。この書籍館は、その地域の状況に対応し、商工業者の子弟の便利を図ることに重点がおかれていた。

『速記彙報』⁵²⁾の「大日本教育会書籍館」には、明治28（1895）年1月の主幹伊東平蔵の談話が掲載されている。伊東は大日本教育会書籍館において、「新刊書の提供に力を入れていたこと」、「カード目録や解題目録の作成を行っていたこと」などを、統計数値を交えながら、詳細に紹介している。書籍館での業務に関して、伊東は「明治26（1893）年8月に自分は書籍館の仕事を辻から依頼され、主幹には充分な権限を与えるという約束で、経営を引き受けたこと」、「書記3人と給仕2人、小使1人の給料は閲覧料で支弁することにしたこと」、「書籍館を基本金も寄付金もなく維持するのは難しく、ヨーロッパなどにはそうした例はないこと」、「自分が引き受けてからは、目録や図書の並べ方を整理し、新版の図書を早く見せられるように、図書は直ぐに目録に載せたこと」、「学術講習者の便を図るために、保証金を前納さ

せて図書の貸出も始めたこと」,「図書が寄贈されると寄贈書目に登記し,図書に印を押して,カードに書名,著者,発行所,代価,出版年月,寄贈年月を書き,図書に挟む。書庫のどの棚に入れるかを決めて,図書に番号を付けて函架目録に載せて,一枚の紙に書名,番号,函号を書いて閲覧室に張出し,閲覧室の分類目録に書き込んだこと」,「寄贈者に礼状を発送し,解題目録を作成して大日本教育会雑誌に掲載したこと」など,具体的な業務内容について説明している。

昭和3(1928)年に日比谷図書館で行われた「廿年前に於ける我が國圖書館事業を顧みて」¹⁷⁾の講演でも,伊東は大日本教育会書籍館の経営がなかなか立ち行かないので,経営を依頼され,明治26(1893)年7月頃からこれに携わったとしている。閲覧料をとって係員の俸給とし,図書は寄贈図書をまち,文学書や小説等はすべて辻男爵の寄贈依頼によって寄贈を受けた。ボアソナード文庫は法律書が多く,弁護士や高等文官の受験生が来て,経営的には大いに助かった。伊東は2年ばかりの間,この図書館を預かり,図書と建物があるばかりでは仕方がないので,地方に貸出も行った。この時の経験で,伊東は大きな図書館を建てるよりも小図書館を方々に建設しなければならないと思い出したとしている。しかし,日清戦争が始まり,参謀本部の仕事やイタリアに関する本職のほうに忙しくなり,明治28(1895)年の終頃には教育会の仕事を断ったと語っている。

伊東が明治28(1895)年1月に,イタリア語学習者用の教科書として出版した『伊語教授書』(*Primo libro di lettura per uso degli studenti giapponesi*)⁵³⁾の奥付の発行日は明治28(1895)年1月29日とあり,編集兼発行者である伊東平蔵の住所は,東京市本郷区元町2丁目6番地になっている。この頃には既に,伊東の居住場所が伊学協会とは異なった住所であったことがわかる。

2. 結婚と東京外国語学校講師

私生活では,伊東は明治25(1892)年2月には,漢学者,演劇評論家,劇作家としても知ら

れる依田学海(1833-1909)の二女琴柱と結婚している。学海の日記である『学海日録』(明治25(1892)年2月から明治34(1901)年1月までの期間)には,たびたび伊東平蔵の名前が登場する。『学海日録』によれば,明治25(1892)年2月21日に,伊東家で結納が取り交わされ,2月27日の婚姻の日に,学海は伊東の金助町の自宅を訪れた⁵⁴⁾。また,明治26(1893)年7月27日に,学海は伊東が7月26日に転居した一橋の家を訪問している。『学海日録』には,“ここは,教育図書館の背にあたりて,庫あり。茶室あり。庭も木立茂りてよし。唯人家の間をめぐり入るがゆへに狭苦し。”⁵⁵⁾と記されている。

『千代田図書館八十年史』⁵⁰⁾は,『帝国教育会五十年史』の寺田勇吉による大日本教育会図書館についての報告を引用し,明治26(1893)年7月1日に教育会及び書籍館の改築落成式が行われ,書籍館の規模は平屋1棟,その中に閲覧所,事務室,製本所各1室,合計93坪余であり,我が国最初といわれる約21坪の洋式書庫を備えていたとしている。学海が伊東宅を訪れたのは,この落成式を終えて間もない頃であり,この時期の伊東が教育会書籍館の背部に住みながら,その経営実務にあたっていたことがわかる。

東京都公文書館所蔵の伊東の履歴書²³⁾によれば,明治30(1897)年5月には陸軍通訳生,参謀本部付などを務め,明治31(1898)年9月には伊太利国皇帝陛下⁵⁶⁾から銀製の衛生記章を受領と記されている。国立公文書館にも伊東が提出した明治31(1898)年8月12日付の「外国記章受領佩用願」⁵⁷⁾が残っており,日伊交流への貢献を認められていたことがわかる。翌年,明治32(1899)年9月10日には,伊東は東京外国語学校の講師となり,1ヵ年600円を交付されることになった。彼は,外国語教師で在日イタリア公使館の書記官であったアルフォンソ・ガスコ,囑託講師の吉田秀男とともに講師としてイタリア語を教えるようになる。

伊東は,この大日本教育会書籍館を経営している第3期から,日本文庫協会(日本図書館協会の前身)での活動を始めている。和田萬吉は,『図

書館雑誌』の「創立当時の協会」⁵⁸⁾と題した記事で、創設時の明治25(1892)年頃に、年2,3回開催された例会に出席数の多かった人の一人に伊東の名をあげている。伊東は、出席者の中でも論議の提出や事務取扱上の話題を提供したと述べている。また、創立時から和田が往昔を語りあう人物は、太田為三郎と伊東平蔵等であるとしている。

D. 第4期 大橋図書館、日比谷図書館、宮城県立図書館時代

伊東はほぼ1年間の講師生活を経て、明治33(1900)年には東京外国語学校教授になった。図書館の分野では、私立の大橋図書館、公立の東京市立日比谷図書館の基礎を築いた時期にあたる。伊東が、イタリア語の教育者としての生活と図書館経営者の生活を両立していた時代である。

1. イタリア語教育者としての伊東

明治33(1900)年9月28日に、伊東は東京外国語学校教授に就任している。「伊東平蔵関係資料」の備忘録の上巻の巻末には、9月29日付の辻新次が伊東にあてた東京外国語学校教授拝命を祝った書簡が残されている。外国語学校教授拝命の翌日に送られたこの書簡で、辻は伊東の教授就任が本人の名誉に留まらず、伊語学の拡張においても重要な事柄であると書き送っている。その後、伊東は東京外国語学校で教えながら、さらに東京美術学校、東京音楽学校でもイタリア語の教鞭をとっている。『朝日新聞』明治35(1902)年3月18日朝刊の記事⁵⁹⁾によると、同年3月3日から美術学校では随意科、音楽学校では必修としてイタリア語の科目が設置され、東京外国語学校教師の伊東平蔵と吉田秀男が教えるようになったとある。

『東京外国語大学史』⁶⁰⁾[p.618]は、東京外国語学校教授としての伊東について、伊語講座のための『伊語教授書』⁵³⁾や『伊語読本』⁶¹⁾などを著し、我が国で最初にイタリア語教育にあたった教官で日本におけるイタリア語学の開祖であり、辞典や入門書のない時代に初学者に文法体系を説明

し、読み書き指導することに専念した人物であると高く評価している。『伊語教授書』⁵³⁾は本章C節第1項で取り上げた図書であり、『伊語読本』(*Avviamento alla lettura della lingua italiana*)⁶¹⁾は明治43(1910)年4月発行のイタリア語の綴字と発音を学ぶために作成された教科書である。

明治37(1904)年に東京外国語学校伊語学科を卒業し、洋画家でもあり、小説家でもあった有島生馬(1882-1974)は、『思い出の我』⁶²⁾の中で、ナポリを訪れた際には、伊東の紹介でナポリ東洋語学校の教師ガティノーニが出迎えてくれたと記している。このガティノーニは伊東がヴェネツィアで日本語を教えていた時代の教え子であり、『日本口語文典』を著した人物^{39), 63)}である。「伊東平蔵関係資料」の昭和3(1928)年2月3日の伊東の日誌には、有島から16日にパリに出發するという知らせを受け、餞別の品を持って訪問したが、有島は外出中であつたという記述が見られる。伊東と教え子達との交流は、卒業後も継続されていたのである。

2. 大橋図書館主事

伊東が創立時の大橋図書館主事として就任した経緯は、『水哉坪谷善四郎先生傳』⁶⁴⁾によると、当時多忙を極めていた坪谷が、田中稲城に主事の人選について相談し、伊東を推薦されたことに始まる。『大橋図書館四十年史』³³⁾は、大橋図書館における伊東の功績について我が国図書館の先覚者であり、大橋図書館最初の衝にあたり、建築設計についてもその意見によるところが多かったとしている。明治35(1902)年2月16日に、主事伊東平蔵、博文館編集局員で副主事の岸上操に図書館の組織及び諸規則の起草が委嘱された。

伊東は明治35(1902)年4月には、『図書世界』の「通俗図書館」⁶⁵⁾と題した記事の中で、帝国図書館以外に図書館と称すべきものが存在せず、教育の各程度に相応した図書館を設立する必要がある、今、中流階級以下の人々を対象とした通俗図書館の建設が急務であると指摘している。伊東は、さらに「東京市の面積と人口からみて、今日は通俗図書館を所々に設立することが緊要である

こと」,「各府県に書籍館が創設されているが、大方は旧藩伝来の古書を収集して作られたもので、娯楽と普通教育の発達を助けるものは稀であること」,「まだ図書館がどのようなものかが理解されていない状況の中で、図書館が旧藩伝来の古書の集積所と憶測されるのは、将来の図書館の発達の障害となること」,「通俗図書館の設立が重要であるにもかかわらず、通俗図書館の模型がないこと」をあげ、これが伊東が大橋図書館の設立に大いに賛同し、設立維持に協力する所以であると述べている。

『国民新聞』明治34(1901)年11月10日の「博文館主大橋佐平翁逸事」⁶⁶⁾の記事で、石黒忠恵(1845-1941)館長は、大橋図書館の建設趣旨について、「大橋図書館は日要切実の本を調べ読もうという人やその日の新聞や雑誌を直ちにみようという人のための特色を備えた図書館にしたいと考えていたこと」,「小僧とか車を引く輩という人々に対して、門前に荷物を下ろして泥足のままで、ちょっと入って新聞なり雑誌なりを休息時間に見るための便利を与えるような図書館を意図し、大橋翁の了解を得ていた」と述べている。このように、大橋図書館は当初から中流階級以下の人々が気軽に立ち寄ることのできる図書館を目指して構想された図書館であり、伊東はこの考え方に共感して大橋図書館の実務を担当することになったのである。

明治35(1902)年6月15日に大橋図書館の開館式が挙行され、6月19日に伊東は主事に正式に任用された。当時、図書館を設立して財団法人とするには寄付行為証書を作成して、所轄官庁を経由して文部大臣の許可を受ける必要があった。東京都公文書館には明治35(1902)年5月25日付の寄付行為証書⁶⁷⁾が残されている。大橋図書館規則によると、普通の図書雑誌等を収集し、広く公衆の閲覧に供して一般社会の知識啓発を目的とし、満12歳以上の者を対象としていた。開館時間は開館当初は午後5時までで、明治36(1903)年8月1日から夜間開館が実施された³³⁾。

大橋図書館主事時代の伊東の大きな功績の1つ

として、第1回図書館事項講習会の開催をあげることができる。伊東は、明治36(1903)年の大橋図書館一周年記念に、大橋図書館において日本文庫協会主催で日本初の図書館講習会の実施を主唱した¹⁹⁾。伊東のこの提案により講習会開催の運びとなり、田中稲城(1856-1925)、和田萬吉(1865-1934)、市島謙吉(1860-1944)、西村竹間(1850-1933)、太田為三郎(1864-1936)、坂本四方太(1873-1917)、赤堀又次郎(1866-??)⁶⁸⁾が賛同し、伊東を主任として、講習科目その他が協議された。朝日新聞の明治36(1903)年6月2日朝刊の記事「図書館事項講習会」⁶⁹⁾では、日本文庫協会は8月1日から大橋図書館において図書館に関する事項の講習会を開くことに決し、講習料は2円であるとしている。しかし、「図書館人を偲ぶ座談会」によると、図書館講習会の聴講料は無料で講師料は講師も無論無料であるのみか多少の手銭を出したようである。この講習会は明治36(1903)年8月1日から14日の2週間、日曜も休講せず、一日平均3時間行われた。『日本図書館協会五十年史』⁷⁰⁾や『大橋図書館四十年史』³³⁾に基づいて、講習科目と講師担当者をまとめたものが第3表である。

伊東が中心となって作成された講習の内容は、正科(9科目)と科外講演(8科目)に分かれ、目録編纂法と図書館管理法には実習があった。図書館史に欧米と日本があり、さらに和漢書の書史学の補遺が設定されている。講演では徳川時代文学史が設定され、この時期の通俗図書館として徳川時代の文学に対する知識が必要だったことがわかる。受講生は、募集人員30名に対して全国から54名の応募があり、全員の聴講を許可し、実際に修了証書を授与されたのは37名であった。この講習の開催が契機となって、後に明治41(1908)年7月に文部省主催の講習会が開催されることになる。

『大橋図書館四十年史』³³⁾は、講習会員名簿の41名の名前を挙げ、大部分の受講生に所属名が記されているように、受講者は機関から派遣された人々であるとしている。受講者には、成田図書館主事となる高津親義、山形県立図書館長となる

第3表 日本文庫協会主催図書館事項講習会科目¹

正 科	科目名	講 師	科 外 講 演	科目名	講 師
	図書館設置法	伊東平蔵		図書館の必要	市島謙吉
	図書館管理法	田中稲城		統計学一班	伊東祐毅
	目録編纂法	和田萬吉		学校図書館	長谷川館一
	欧米図書館史	和田萬吉		カード目録	錦織精之進
	図書館管理法実習	西村竹間		徳川時代文学史（上半期）	千秋季隆
	目録編纂法実習	太田為三郎		徳川時代文学史（下半期）	長達恒
	図書分類法	坂本四方太		官庁図書館	楊龍太郎
	和漢書史学及び日本図書館史	赤堀又次郎		欧米図書館概況	鹽澤昌貞
	和漢書史学補遺	中根肅治			

¹ 出所：『大橋図書館四十年史』³³⁾、『日本図書館協会五十年史』⁷⁰⁾より作成。

渡辺徳太郎等の名前が見られる。また、当時は京都大学図書館員としてこの研修を受講した片山信太郎は、日比谷図書館勤務を経て鹿児島県立図書館長となっている。片山は、「明治に生れたる圖書館の追憶」⁷¹⁾で、伊東が片山に送った私信を引用し、伊東自身が第1回図書館事項講習会は図書館の宣伝と図書館員の養成に大きな効果があったと評価していたことを記している。彼が述べているように、この講習会を通じて、図書館界を牽引していく指導者たちが育成されていったのである。

伊東は、明治39（1906）年9月10日には東京市立日比谷図書館主事に転任することになる。辞任にあたって伊東は、後任として太田為三郎を希望したが、田中稲城が太田の帝国図書館からの転出を認めなかったために、坪谷が後任の主事となった²⁾。「伊東平蔵関係資料」に見られる明治39（1906）年8月10日付（同年8月11日の消印付封筒共）の書簡には、田中が伊東に対して、太田の招聘が中止となり好都合であると書いている。このような書簡のやり取りは、当時の図書館界において図書館経営を担う人材を探すことが難しかったことを示している。そこに、伊東が将来を担う人材の育成を目的とした講習会を提案した背景があったと考えられる。

3. 東京市立日比谷図書館の準備

伊東は明治33（1900）年頃から、東京市教育会調査部で図書館設置案の作成にあたる。昭和3（1928）年「廿年前に於ける我が國圖書館事業を顧みて」の講演¹⁷⁾で、伊東は明治33（1900）年に寺田勇吉が文部省参事官になり、東京市教育会の副会長に就任した後、彼から東京市における図書館について調査するように依頼されたと述べている。そこで、原案となるべきものとして「図書館設置の方法」を彼自身が作成した。内容としてあがっているのは、次の9つの項目である。

- 一 各區ニ圖書館ヲ設置スル事
- 一 新築ノ場所ハ公園、社寺境内其他便宜ノ場所ヲ選ビ設置スヘシ
- 一 設置ノ當時ハ学校若クハ公衙ニ假設スルモ妨ケナシ
- 一 私設ノ圖書館或ワ私有文庫アル場所ニ於テハ之ヲ利用シ又ハ相當ノ補助金ヲ與ヘテ使用スルヲ得
- 一 設置ノ費用ハ市ノ負擔タルヘキ事 但建築費（煉瓦造二十坪）凡三千圓、創業費一千圓
- 一 主トシテ通俗ノ図書ヲ備フル事 但各図書館最初ニ在テハ三千部乃至五千部ニテ足ルベシ
- 一 圖書ハ購入スル事勿論タリト雖モ有志者

又ハ書林、著述者ニ寄贈セシムル方法ヲ採ル事

- 一 開館ハ晝夜タルヘキ事 但當初ハ夜間ノミ開館スルモ妨ケナシ
- 一 維持費ハ一館一ヶ年凡八百四拾円トス但役員給料役員二名月給十圓小使一名月給五圓二十五圓、書籍購入費三十圓、雜費十五圓

日比谷図書館開館前の東京市立図書館設立論議には、主に3つの図書館構想がみられる⁷²⁾。上記の伊東平蔵等の東京市教育会による小規模図書館構想(明治33年)の他に、坪谷善四郎による大規模図書館構想(明治35年)、寺田勇吉による中規模図書館構想(明治37年)があった。図書館設置の方法にみられるように、伊東平蔵等の東京市教育会は、蔵書規模3,000部から5,000部、建築費3,000円、創業費1,000円で小規模図書館を設置しようとした。当初は学校付設図書館でもよいから、各区に図書館を作ろうとしていたのである。一方で、坪谷は蔵書規模100,000冊、創設費150,000円の大規模図書館を建設しようとし、寺田は蔵書規模30,000冊の中規模図書館を90,000円で創設しようと考えていたのである。

伊東は、東京市立図書館設立に際して、東京市教育会調査部で図書館設立について論議し、東京市、東京市教育会、日本文庫協会等の連絡や調整役を行っている。『東京市立図書館一覧』の大正15年版⁷³⁾によると、明治33年(1900)年11月17日、東京で開催された日本文庫協会の秋季例会席上で「近く設立せられようとしてゐる、東京市立図書館の規模等に就て、東京市から本会へ諮詢せられるように申込む件」が決議された。この申し入れを東京市に伝達したのが、東京市立図書館設立に関係していた伊東平蔵であった。そして、11月には、伊東は東京市教育会において、原胤親、辻新次とともに「図書館設置の方法」について協議を行っている。

この4年後の明治37(1904)年3月に東京市会で坪谷善四郎等の東京市立図書館設立の建議が決議されている。さらに、明治38(1905)年

7月15日には、尾崎東京市長から日本文庫協会に対して、東京市立図書館の規模等に関して諮問が行われた。この諮問に基づいて、和田日本文庫協会長により、伊東平蔵、市島謙吉、田中稲城、坂本四方太、太田為三郎の5名の調査委員が選出された。審議の結果は、和田から東京市に伝えられた。この時に和田が選出した委員は、本節第2項の大橋図書館で実施された第1回図書館事項講習会に賛同して推進した人々である。また、伊東は東京市教育課長戸野周二郎と、明治39(1906)年の春から秋にかけて打ち合わせを行い、図書館設置に関する具体的協議を行っている。このように日比谷図書館の基盤を形成する段階で、伊東が果たした役割は大きいと考えられる。

その後、明治39(1906)年7月には、東京市会で市民のために図書を収集して供給する通俗図書館設立を目指した大規模予算が決議され、本格的な設立準備の段階に入る。いよいよ日比谷図書館の開設準備の段階に入って、専任者として相当経験のある人物の任用が必要になった。しかし、適任者を得ることが難しかったために、既に図書館経営に熟練していた伊東が選ばれた。この時、伊東が専任ではなかったために、囑託者として東京帝国大学の文科史学科卒業の文学士名和長正、事務員として石川源一郎、牧田勝、帝国図書館司書で休職中であった文屋留太郎が任用されている。伊東は大橋図書館主事と東京外国語学校教授を兼任していたために、就任にあたり、大橋図書館長石黒忠恵と東京外国語学校長の高楠順次郎(1866-1945)への照会が行われている。こうした手続を経て、伊東が明治39(1906)年9月から事務囑託として、月60円で任用され開館準備にあたることになったのである²³⁾。

伊東が事務囑託に就任した1カ月後の10月には「備付圖書選択標準」⁷⁴⁾が公表され、東京市立日比谷図書館の圖書選択基準が明確に示されている。『時事新報』明治39年11月22日「日比谷図書館」の記事によると、備付圖書選択基準は次の10項目であった。

- 一 市民の日常生活に必要な参考図書

- 二 読書の趣味を涵養するに適する図書
- 三 実業に関する図書
- 四 一般学生の自修に資すべき図書
- 五 東京市に関する図書
- 六 官公学校及公私団体の刊行書
- 七 内外市政に関する図書
- 八 家庭の読物として適当なる図書
- 九 學術技芸の研鑽に資すべき辞書及百科全書類
- 十 内外新聞雑誌を蒐集する事

収集範囲は多岐にわたり、通俗図書館として市民の日常生活に必要な図書、読書趣味を養う図書、実業に関する図書、学習用図書、家庭読物のほかにも、市政に関するものや東京市に関する図書、官公庁出版物などを中心としたコレクションの形成を目指していたことが分かる。

しかし、このような収集方針が設定されていたにもかかわらず、東京市立日比谷図書館の蔵書構成に大きな影響を与えた出来事が発生する。それは、明治40(1907)年9月の宗教学者の高楠順次郎による日英文庫の寄託である。高楠がイギリスに留学していた際に、英国人エリザベス・アンナ・ゴルドン(Elizabeth Anna Gordon, 1851-1925)と親交を結んだことにより、日本に100,000冊の洋書コレクションが寄贈されることになった。『日本』明治39年12月1日「第二図書館と建築費」⁷⁵⁾の記事には、日比谷図書館は工事中であるが、英米両国の有志から寄贈された外国語の図書と本邦の図書を備付けた図書館を、神田一ツ橋通り付近に建築する見込であるとしている。しかし、この計画は実現せず、東京外国語学校の校長であった高楠から東京市長宛に明治40(1907)年9月12日付の「日英文庫寄託の請願書」⁷⁶⁾が提出され、建設中の日比谷図書館に寄託されることになったのである。「伊東平蔵関係資料」備忘録第3巻には、9月12日付消印の和田萬吉から伊東宛の、日比谷図書館評議会において日英文庫が一先ず日比谷図書館に保管されることに決まったとの書簡が見られる。

明治40(1907)年11月30日に、文部大臣に

より日比谷図書館の設置が認可された。日比谷図書館の建設予算は133,180円であり⁷⁷⁾、伊東案の小規模よりも大きく、坪谷案に近い予算になった。日比谷図書館の開館前には閲覧料無料を目指していた⁷⁸⁾。しかし、無料化は実現できず、特別閲覧4銭、普通閲覧2銭、児童閲覧1銭、新聞雑誌閲覧1銭に設定された。

明治41(1908)年3月には、渡邊又次郎(1866-1930)が主事に任用され、伊東は図書館事務を嘱託された。彼は、同年5月に本務への専念を理由に、依願退職している。伊東の日比谷図書館での在任期間は1年6カ月と短い、大橋図書館設立前から東京市立図書館設立論議で中核的な役割を果たしている。東京市がその功勞に対して300円を贈呈⁷⁹⁾していることから、彼の業績が高く評価されたことがわかる。

4. 宮城県立図書館調査報告

『宮城県図書館百年史』⁸⁰⁾によると、宮城県図書館の前身にあたる書籍館は、明治14(1881)年7月25日に宮城師範学校内に開設された。明治26(1893)年には旧宮城師範学校付属小学校校舎を修理して、独立館舎が設けられ、明治36(1903)年12月に新たに特別閲覧室や婦人閲覧室を設けるなどの変更が行われた。また、蔵書の増加にともない書庫の狭隘化への対策が必要となった。明治40(1907)年4月の文部省令に従って、館名に費用負担者名を表示することになり、「宮城県立図書館」と改称されたのである。

明治40(1907)年に、亀井栄三郎(1864-1913)知事は書庫新築だけではなく図書館全館の新築構想まで発展して考えて、伊東に対して図書館調査を依頼した。「伊東平蔵関係資料」備忘録の第3巻には、8月25日付で宮城県庁の下條幸次郎から伊東平蔵宛に、宮城県の嘱託を依頼するための手続に関する問い合わせの書簡が残っている。この調査は500円の予算で、東京外国語学校教授の伊東を顧問として実施された。伊東は同年10月4日付で宮城県立図書館に関する調査事項について報告書を提出している。伊東は宮城県立図書館の現状をとらえ、改築、蔵書、目録、館員、経費

の項目にわけて、公立図書館として必要な改善点を指摘している。注目すべきことは、明治40(1907)年の時点で、既に伊東が図書館経営についてコンサルタント的業務に従事し、いわゆる「人」「物」「金」といった観点からの調査報告を行っている点である。

改善案では、第一に着手すべきこととして、本館の改築をあげている。建物の建増と合併の繰り返しによって発生した図書出納の遅れ、利用者の動線の交錯の問題、書庫の狭隘化、火災による資料焼失の危険性等の問題点をあわせて指摘している。次に、運営方針の改善点としては学者、学生が利用者の8割を占める現状に対して、一般の人々すなわち下層社会の者にまで利用を広める必要があるとしている。図書館が、学校教育を補うだけではなく社会教育の必要な機関となるためには、新刊書の増加は最大緊急事項であり、巡回文庫の制度を設け、県下に普及する必要があるとしている。そして、図書の収集について選択基準を設ける必要があるとして、次のような選択基準をあげている。

- 一 縣下一般ノ住民特ニ市民ノ日常調査、参考及研学ニ必須ナル圖書
- 一 学生ノ自習又ハ受験用ニ資スベキ圖書
- 一 家庭ノ読物タルト同時ニ読書ノ趣味ヲ涵養スルニ適当ノ圖書
- 一 実業ニ関スル圖書
- 一 個人ニテ得易カラザル字彙及百科全書ノ類
- 一 本縣及伊達家ノ沿革等ニ関スル圖書

市民の日常生活に必要な有益な図書、読書趣味を養う図書、実業に関する図書、学習用図書、家庭読物のほかに、宮城県に関する図書、さらに伊達家の沿革が加えられている。市民の日常調査に必要な図書、学生の受験用図書、個人では入手しがたい辞書類の収集など、日比谷図書館における収集方針と比べると、より具体的な項目を示している。

伊東はこの報告書において、さらに、書庫の狭

隘化対策として、保存する価値のない図書は廃棄処置をとることを提案している。

- 一 法律、兵事、數學、醫學、文學書中ニ於テ明治初年ノ發刊ニ係リ今日全ク求覽ナキ圖書
- 一 補足ノ必要ナキ明治年間活版刷欠本
- 一 一、二号ヨリ所蔵ナキ雑誌、新聞紙ノ類

既に明治40(1907)年の段階で、法律、兵事、数学、医学、文学書の特定期間を定め、利用率の低いものについては、明治初頭年発行のものを対象に廃棄するとある。ここに見られる特徴は、単なる狭隘化対策としての廃棄ではなく、コレクションの鮮度を重視した視点であり、効率的な新陳代謝である。また、雑誌、新聞については、1、2号から所蔵しているタイトルのみを維持するという観点も示している。伊東が、図書館の利用活性化のために、コレクション更新の必要性を意図していることがわかる。

伊東は大正2(1913)年2月11日に行われた宮城県立図書館の落成式に招待された際の様子を『図書館雑誌』第17号の雑報「宮城県立図書館の改築落成」⁸¹⁾の記事の中で次のように語っている。宮城県立図書館は、木造2階建て建坪290坪、1階には普通閲覧室と児童閲覧室があり、2階には、貴賓室が設けられ、このほかに婦人閲覧室と特別閲覧室が屏風式の板戸で仕切られ、取り外すと37坪の一室になる。このスペースは通俗講談会などをするための会場として使用することができる。書庫は煉瓦造の3層であった。汽罐室には放熱器が備え付けられ、各室に蒸気を通じていた。それぞれ各室にはシャンデリア、電燈が装置され、夜間使用する諸室にはガス灯が設備されていた。1階の普通閲覧室の北面中央に貸付台が設けられ、その右側に新着図書展列棚、左側には辞書棚を配置して、辞書の多くは貸付の手続は省略される仕組みになっていた。『宮城県図書館百年史』⁸⁰⁾によると、明治42(1909)年3月施行の宮城県立図書館規則は大正2(1913)年に改正され、開館時刻は季節によって午前8時と9時の2

通りがあり、閉館時刻は年間を通じて午後10時までになった。改築時の暖房器具や照明設備の充実、夜間開館への配慮であったと考えられる。

第4期の伊東は、大橋図書館においては、新規に創設する私立の通俗図書館の経営に必要な組織や規則の整備を進めた。また、初めての図書館事項講習会の実現を通して、図書館界での人材育成への道を開いた。そして、第3期で得た小規模図書館を方々に作るという考え方に基づいて、東京市立図書館を設立するにあたって、各区に1館設立するという構想を提起している。まだ図書館のない地域に図書館を設立していくためには、最初は学校付設図書館でもよいので、まず地域の人々に身近な図書館を設置するというを示しているのである。宮城県立図書館については、伊東は建物、人、予算の観点から見直しを提案している。新刊書の重視や郷土資料の収集、コレクションの更新等に利用中心の県立図書館としての視点を示している。しかし、通俗図書館との区別は、それほど明確であるとはいえない。

『河北新報』明治41年6月3日「本縣書籍館の新方針」⁸²⁾の記事によれば、伊東に囑託して調査を実施し、今回、東京外国語学校伊語科卒業生で多年この方面での経験を有する中嶋胤男(1877-1911)が伊東の斡旋により、主任として赴任することになった。そして、新方針として、美術展覧会では所蔵資料の書目の掲示をするなど、一般との接近を図ることになったと伝えている。『大橋図書館四十年史』³³⁾[p.126]によると、明治40(1907)年刊行の『図書館雑誌』第1号に中嶋の名が掲載されている。伊東は大橋図書館の館員であった中嶋を登用することで、宮城県立図書館の利用促進を図ろうとしていたことがわかる。

E. 第5期 佐賀図書館時代

伊東は、東京外国語学校教授を退職し、図書館経営の実務に専念している。そして、私立佐賀図書館の図書館創立委員、さらに同図書館の副館長、図書館長を務めるようになる。

1. 東京外国語学校教授退職

大正2(1913)年3月には東京外国語学校教授を退職し、図書館分野の活動を中心に展開することになる。『図書館雑誌』17号雑報「伊東平蔵君並に錦織精之進君の退官」⁸³⁾の記事は、伊東が東京外国語学校教授の職を退いたことを伝えている。

国立公文書館に、大正2(1913)年3月26日の東京外国語学校教授依願免官公文³⁵⁾が残されており、伊東が同年3月4日付で辞表を提出したことがわかる。辞任の理由は、明治45(1912)年9月頃に持病の慢性腎臓炎症が悪化し、腰痛も併発して激務には耐えられないためとなっている。伊東平蔵の依願免官に関する書類は、大正2(1913)年3月24日付で、文部大臣法学博士奥田義人(1860-1917)から内閣総理大臣伯爵山本権兵衛(1852-1933)宛になっている。しかし、『東京外国語学校史』²⁵⁾では、“村上直次郎(1868-1966)校長が伊太利語科の某教授(伊東平蔵であろう)を退職せしめん為に栗田三吾君を教授にした”という同窓誌の記述を引用し、東京外国語学校教授退官は伊東の本意ではなかったと述べている。この東京外国語学校退職をきっかけに、伊東は本格的に図書館経営の道に専念することになる。

2. 佐賀図書館副館長と図書館長就任

イタリア留学中に鍋島直大(1846-1921)侯爵の知遇を得たことから、伊東平蔵は大正2(1913)年1月に、佐賀図書館の創立委員を囑託される。初代館長には、同じように図書館創立委員であった旧佐賀藩士の伊東祐穀(1861-1921)が就任し、東京で執務を取ることになった。そこで、伊東平蔵が副館長として佐賀で実務にあたる形となった⁸⁴⁾。

大正3(1914)年2月11日に開館式が行われ、伊東平蔵は創立事務報告を行っている。伊東平蔵はこの報告の中で、大正2(1913)年5月に東京に創立事務所が設けられ、建物の建築と圖書の収集が行われた。鍋島侯の図書館建設の趣旨は、佐賀の地方民一般の読書趣味を涵養しその顧問の府

となり、学校及び社会教育を裨補拡充し、郷土史料の散逸を防ぎ、地方図書館としての任務を果たすことにあったと述べている。このようなことから、予め次のような図書選択の基準が定められた。

- 一 読書の趣味を増進なさしむるに適する通俗平易の図書
- 一 学生の自修に資すべき図書
- 一 學術技芸の研鑽にしすべき図書及百科全書の類
- 一 地方産業に関する図書
- 一 郷土に関する図書及報告書の類

第一番目の項目には、通俗平易という広い表現が用いられており、日比谷図書館の収集方針に見られる家庭読物という表現は見られない。また、実業に関する図書という表現もなく、地方産業に関する図書という項目をあげ、郷土に関する図書や報告書を重視している。地域に関する情報収集重視という要素が強まっているのが、佐賀図書館の収集方針の特徴といえることができる。

この佐賀図書館時代から、『図書館雑誌』に伊東平蔵の講演内容や文章が掲載されるようになる。伊東は、第8回全国図書館大会で「地方図書館の設置に就て」⁸⁵⁾と題し、佐賀図書館の設立準備に関する講演を行っている。この講演の中では設立準備で重要なこととして、第一に図書館建築について、自分が建築に不案内であっても、建築技師、工事監督、請負人等と一致して工事に参与して監督すること、第二に図書の収集は図書館の種類に応じて、土地の状況に従って一定の標準による必要があること、第三に図書館と世間との関係を密着にし、図書館を学校の補助機関のみではなく、社会教育の一大要具、各個人の参考の府とすることを主張している。地方図書館においても、県内の一都会に所在し将来唯一の中央図書館となる資格のものは、村落等に設置の通俗図書館とは趣を異にし、一面教育図書館たると同時に他の一面においては参考図書館の性質を備える必要があるとしている。

大正4(1915)年5月1日から4日まで、第10回全国図書館大会が熊本、佐賀の両県で開催され、伊東平蔵は、5月2日に九州図書館連合会を代表して2か条の建議案を提出し、さらに「館外貸出に就いて」⁸⁶⁾と題した研究発表を行っている。伊東はこの発表で、佐賀図書館での貸出の実践を例にあげて、図書館と社会を結びつけることが自分の持論であり、そのためには、貸出を請求する人の資格や保証人の有無にこだわらず、館外貸出を積極的に推進する必要があると主張している。日本の図書館には学生が充満していて、学生以外の人々が図書館に来ない。それは日本の家庭の組織が西洋と異なるためであり、この問題を解決するには、貸出を推進する以外に方法はない。そして、図書館に来ることができない人々のために図書館が本を持って行って貸すという方法を推奨している。

この貸し出し方式では、集配人が回って図書を届けるので、従来のように保証人や身元確認は不要だと彼は主張しているのである。利用者には、貸出特別目録を年4から5回作成して配布し、目録の中から選択してもらえば、館内閲覧と抵触することはない。佐賀図書館では、大正3(1914)年4月からこのサービスを開始し、年間200人の貸出請求者がいる。貸出期間は15日間で、月10銭を徴収するものの、月に何冊読んでも構わない。「集配人が三輪の自転車で前の函の中に一杯本を入れて運び、図書館を朝出て昼に帰る」方式をとり、うまくいっていると説明している。

ここで注目すべきは、“三輪の自転車で前の函に本を一杯入れて運び”という表現である。楠田五郎太の「動く圖ノ研究」によると岡山図書館(岡山市立図書館の前身)では、大正11(1922)年に配本が開始されていた。ここで配本に用いられていたのが三輪自転車であり、図書館本館前に3台の配給三輪車が並んでいる写真⁸⁷⁾[p. 278]が掲載されている。この岡山図書館で三輪車を用いた配本が日本で最も早い時期とされているが、それより早く佐賀図書館で既に三輪自転車による配本が実施されていたことがわかる。国内外の情報の変化に敏感な伊東平蔵らしい新たなサービスの

展開といってよいだろう。

佐賀図書館の第3代館長を務めた西村謙三(1861-1937)は、この配達貸出の実施は伊東平蔵の功績であり、ニューヨークで行われている諸官衙又は私人の宅に少しの料金の図書を配達する方式を採用したもので、閲覧者の利便を図ったため、歓迎された。自分が館長になってからは、漸次拡張して乳母車で配達して500人から600人の借覧人があったが、県立移管とともに廃止されたのは遺憾であると回想している⁸⁸⁾。今澤慈海も大正4(1915)年6月21日の朝日新聞朝刊の「図書館の発達九州が第一」⁸⁹⁾という記事で、この貸出方式についてふれ、九州は古い習慣に支配されないで好成绩を収めている。全国の図書館は九州のようにありたいと高く評価している。

伊東平蔵は、大正6(1917)年10月に、佐賀図書館第2代館長に就任し、大正8(1919)年には、「図書館の利用法」⁹⁰⁾と題した論考を『図書館雑誌』に発表している。今や全国で重要な都市に図書館が設置され、町村にも建設されつつある。既に図書館の要不要などではなく、社会一般が図書館を如何に利用するかによって、図書館の効用が現れると述べている。彼は、図書館が青年、大人、男女、貧富の差を問わず自らを教育する所であり、教師や教具を要せず、各人の必要と趣味に従い、経済的自発的に学習できる教育機関であると位置づけている。

伊東は利用促進の観点から、図書の整理に対しても強い関心を示している。『佐賀県立図書館六十年のあゆみ』¹⁵⁾によると図書の整理方法は、大橋図書館の分類方法と同じで、大橋図書館の分類にさらに詳細な細目を加えたものが用いられていた。開館時から佐賀図書館員が大橋図書館で実習し、伊東平蔵と共同で作成したものだろうとしている。目録はカード式で、和漢書分類目録と書名目録、洋書の分類目録の3種類があり、雑誌や講義録の目録は別にされ、館外貸し出し図書目録は1階事務室に備付けられていた。12歳以上ならば、男女を問わず、業務の種類に拘らず無料で閲覧することができた。2階の閲覧室は衝立で仕切られた男子(72名)と女子(12名)の座席が

あり、室内に貸付台や新着図書展列棚が配置されていた。

図書館創立時の館員は、館主、館長、副館長、事務員、出納手、小使の6種類に分かれていた。大正4(1915)年に司書補、大正5(1916)年に書記1名、さらに大正7(1918)年には司書が設置されている。大正4(1915)11月10日には日本初の分館制度導入が企画され、唐津分館が開館しており、開館式で伊東は唐津分館が日本の分館の嚆矢であると述べている。伊東は対外活動の拠点として分館網を整備し、本館開館後5年の間に7分館を設置している。分館を設置した理由は、佐賀市全域に図書館奉仕を拡大し、市民の読書利用の機会の増大を図り、読書普及を図ることにあった。小学校に置かれた分館は校長が主宰し、事務は教員の中から選ばれたものが行った。図書館の経費は地元が持ち、佐賀図書館が図書をすべて配本する仕組みがとられ、このような分館活動が唐津市立図書館や鹿島市立図書館の母体となったとされる。

佐賀図書館と大橋図書館の共通点は、鍋島家と大橋家が創設した私立図書館であることである。一方、この2つの大きな違いは佐賀図書館が後に県立図書館とすることを意図して設立された図書館であり、参考図書館の要素を加味して構想された点である。この時期の伊東は、新刊書の重視とともに、地方図書館において図書館と利用者を結びつけることの重要性を指摘している。それは、館外貸出希望者には自宅に図書を届けるという貸出方法の実施に端的に示されている。身元保証を必要としないという方法は、潜在利用者を開拓する新たな試みといえることができる。

F. 第6期 横浜市図書館時代

『横浜の本と文化』³⁾によると、大正9(1920)年4月、横浜市役所内に図書館建設事務所が設けられた。3月に佐賀図書館長を辞任した伊東は、主任として建築設計、図書の選択・収集・分担にあたるようになった。同年9月には建設事務所が図書館建設予定地の横浜公園内に移された。翌年の大正10(1921)年6月11日には、この建設事

務所を仮閲覧所として横浜市図書館が設立され、伊東が初代館長に就任している⁴⁾。伊東は資料の整備のために分類を検討し、デューイ式の十進分類法により「横浜市図書館と漢書分類表」を作成している。昭和4(1929)年の『日本十進分類法』に先立って制定された分類法である。目録はカード形式で、分類目録、書名目録等が閲覧室に備えつけられていた。

『神奈川県図書館史』¹⁴⁾によると、大正12(1923)年8月には、経済不況のために難航していた新館の建設計画に見通しがつき、新館建設着工の協議が行われていた。しかし、その翌月9月1日に関東大震災が発生し、状況が一変した。伊東の横浜市図書館における最も大きな功績は、この関東大震災によって失われた図書館の再建にあるとされる⁹¹⁾。伊東が講じた緊急の対策は、佐賀や大阪の図書館等から多量の図書の寄贈を受け、県内の篤志家からの寄贈図書等を母体として、さらに新規購入図書の増加を図るという方式であった。また、山口県立図書館、京都府立図書館からは巡回文庫をむかえて市民の閲覧に供したことなど、既に図書館界でその名前を知られ、図書館設立経験豊富な彼ならではの対策を展開している。大正13(1924)年3月には、横浜公園内に仮本館を設立し閲覧業務を開始し、同年9月には館外貸出が開始された。伊東は、閲覧所や横浜公園内の仮本館で一般公開をしながら、本館の創設に取り掛かっている。大正14(1925)年1月に、彼は図書課長に就任している。本館の建設地は当初予定されていた横浜公園内から現在の野毛山に移され、昭和2(1927)年に完成することになる。しかし、伊東は完成前の昭和元(1926)年12月に退職している。

この時期に、伊東は『図書及図書館』に「公共図書館経営に関する感想片々」⁹²⁾を発表している。伊東は図書館の要素として「図書」、「組織」、「設備」を挙げている。図書館の任務として、図書館は自由に各自に学説を構成せしめ、個性を尊重して学問の発育を補助する道場である。作りあがった一皿の料理を説明するところが学校であるならば、図書館は料理の原料をあつめ、一皿の調

理法を考察するところではなければならない。調理の材料収集には力を添えることはできるが如何なる料理をするかということまで関係することは僭越すぎる。社会教育者として立つべき要素は、直接学校の如く教鞭をとらずとも、館員各自が品性と徳操と誠実と勤勉とを具備していくなら、純然たる社会教育者の任務を果たしている。図書館に対する教育者としての伊東の考え方が明確に示されているのである。

また、このほかにも『社会と教化』に「小図書館の建築」⁹³⁾、『図書館雑誌』に「罹災図書館」⁹⁴⁾、「図書館の建築に就て」⁹⁵⁾を発表し、徳川頼倫総裁の死にあたっては「逸題」⁹⁶⁾と題した追悼文を執筆している。

「小図書館の建築」⁹³⁾では、佐賀図書館の分館が貸家で一般の家屋であったことが、利用者の交通の便や利用の妨げになったことを具体例にあげ、図書館としての建物を造営することの重要性を強調している。その上で、新たな図書館を建設するには、その地域の学事状況、住民の種類、習俗、新築館の位置を考えて閲覧人員を予想する必要があるとしている。まず、地域の人口と閲覧人の増加率を見積もり、閲覧室の種類、座席数を決めて、必要な通路や装置の面積を見積もって算出する。蔵書は開館時に一度に購入するのではなく、数年間に分割して備付ける。伊東は佐賀図書館での経験を基盤に必要な項目を整理し、地方小図書館運営の基礎的理論を述べているのである。

「罹災図書館」⁹⁴⁾では、伊東は関東大震災直後の帝国大学図書館、大橋図書館、東京市立図書館、横浜市図書館の建物や蔵書の被害状況と対処について書いた文章を発表している。罹災図書館数は15館で、焼失した図書は725,000冊に及び、この震災は日本の教育普及の一大頓挫であると述べている。「図書館建築に就て」⁹⁵⁾では、図書館建築の目的は、図書の利用使用を整頓を便利にし、保存を完全にするにあるとしている。彼は「堅牢」、「実用」、「美観」の3つを実行する必要があることを主張している。

伊東は、「堅牢については、耐震、耐火の構造、特に火災には細心の注意を要すること、夜間に火

災が発生した際に駆けつける体制を考える必要があること」,「実用については、建物を図書館用途の実際に、よりよく適合するように構成するには、配室の具合が重要である。小図書館を建造するには出納所を兼ねた事務室を中心とし、閲覧室や書庫をなるべく緊密に設計する。出納所を中央に置き、その左右両翼に大人及び児童閲覧室を配置する。出納所の背後に書庫を配置し、出納席から一人で貸付をしながら全館を監守することができるようにすること」,「多少規模が大きな図書館では、婦人室、新聞室、目録室、閲覧室休憩室、製本室等を設け、館の種類によっては郷土資料調査室を設けること」,「最近では、各種展覧会、講和会等を開設し博物室を併置する趨勢にあり、今後の増築のための敷地を見込んでおく必要があること」をあげている。さらに、伊東は「図書館建築は、堅牢と実用の2要件が徹底的に満たされれば、外観美については余り問う必要はなく、「美観」については、華美な外観や派手な内装を避ける。観る者に一種の印象を与え、多少の誘引的装飾を行い、各室の天井、壁等の色彩、閲覧室の採光、換気にも注意する必要がある」と指摘している。古希を期に横浜市図書館を辞任した伊東は、次の第7期でも『図書館雑誌』に「横浜市図書館に就て」⁹⁷⁾を発表し、自身が設計した横浜市図書館を紹介している。

G. 第7期 最晩年

伊東は昭和元(1926)年12月に横浜市図書館を退職した後も、神奈川県で後進の指導にあたるとともに、日本図書館協会における活動も継続している。

1. 神奈川県主催図書館講習会

伊東は、横浜市図書館退職後も、神奈川県学務課において県内図書館の育成指導にあたった。『図書館雑誌』21巻5号⁹⁸⁾では、『横浜毎朝新報』昭和2年3月3日の記事「図書館員指導」を引用し、神奈川県下の図書館の内容改善のために、元横浜市図書館長伊東平蔵を視察指導員に囑託する、1日平均2箇所巡回の予定で20日間にわた

り、実地指導を行い、現状を調査して県立図書館設立の方策を研究すると報じている。実地指導の内容は、「図書館文庫の機能及事務」、「図書選択及出納」、「統計予算」であった。

一方、伊東は昭和3(1928)年には、1月15日から17日の3日間にわたって、神奈川県主催の図書館講習会の講師を担当している。『図書館雑誌』22巻2号の「神奈川県主催図書館講習会」⁹⁹⁾によると、受講者は公私立図書館長、町村長、学務委員、小学校教員、女学校教員等28人である。修了後には懇談会が開かれ、図書館協会設立の議も成立した。講習科目は「輓近に於ける図書館運動の趨勢」松本喜一(帝国図書館長、2時間)、「図書館の種類及機能」今澤慈海(日比谷図書館頭、3時間)、「通俗図書館の建設及び組織」伊東平蔵(元横浜図書館長、3時間)、「通俗図書館の経営及常務」伊東平蔵(2時間)、「児童図書館の構成」竹内善作(浅草図書館長、2時間)の他に、3時間の実習が行われたとある。

「伊東平蔵関係資料」の昭和3(1928)年1月15日の日誌⁵⁾によれば、午前10時から12時まで、今澤慈海が図書館の機能について講演を行い、午後1時から3時まで、伊東が通俗図書館の職能、使命、構成、館長候補、図書館委員の任用設置について話した。16日は午前中に竹内善作の児童図書館に関する講演があった。伊東はその後、図書館建築、図書の購入等一切の事項、記帳、原簿の効用を説明し、午後2時に図書館を出て、午後5時に帰宅して翌日の講習の準備をしている。17日は伊東が予め指示を与えておいたカードの書き方について受講者の質問に応じ、10時半から12時までは松本喜一による図書館趨勢と題した講演が行われた。午後1時から2時半まで伊東が寄贈書、出納、統計等について講演し、午後3時から受講者の発起で懇親会が行われた。この会合で神奈川県図書館協会設立の議を決して、午後6時過ぎに散会したと記されている。この講習は日曜日から火曜日にかけて3日間にわたり、図書館管理者向けの実務講習として実施され、講習時間の半分以上を伊東が担当したことになる。1月20日に、伊東は午前中に日比谷図書

館の今澤を訪ねて講習会の礼を述べ、午後は鍋島邸を訪れている。しかし、不在のため佐賀図書館移管の件について、西村館長の見込等を話して伝達を依頼したとある。日誌の記述から、伊東が図書館長を引退した後も、佐賀図書館の県立移管に熱心に取り組んでいたことがわかる。

横浜市中心図書館には、『通俗図書館の建設管理及経営』¹⁰⁰⁾と題した記録が残っている。この記録は400字詰原稿用紙にペン書きで記され、巻頭部分には「元横浜市立図書館長 伊東平蔵」とある。冒頭に“今昭和戊辰の歳首は例年に異って畏くも御即位の大典を奉祝すべき新年に際し此の図書館講習会を開かれたのは最も時機に適した意味深長的美挙と申さねばならぬのであります”という挨拶の言葉が記されている。このことから、この記録が神奈川県図書館講習会の記録であることがわかる。講義にあたって冒頭で、伊東は3日間で合計7、8時間なので、理論はできるだけ省略して建設法、管理法、経営法で実地に直ぐに役立つ事为目标とし、着手し実行すべき方法、順序、要件等を説明すると方針を述べている。

伊東は通俗図書館は善良な通俗平易の図書を収集して一般民衆の閲覧に供するところと定義づけている。図書館の建設にあたって必要なのは、第一に将来館長になるべき候補者の選任、第二に図書の選択収集、第三に建物がその次であるとしている。町村立図書館を建設できない場合は、準備的に小規模の図書館、若しくは文庫をつくり、事業として成り立つ時期をみて町村立経営に移す。土地の事情に応じて設立方法を考え、町村民の援助を得ることが効果的であると指摘している。さらに、具体的な設置手続、申請書の書式、図書館の館則作成例を示している。

伊東は図書館の建築について、「建物は規模の大小にかかわらず、事務室又は図書出納所を中心として配室し、公衆が手軽に出入りできることが第一条件である」として、「通俗図書館は参考図書館を兼ねた府県立図書館とは違い民衆化して日常生活上で利用されるよう構成し経営しなければならない」、「民衆の活躍の中心地に建設し、業務や家事の合間に利用することができ、図書を自宅に

借り出して読書できるように仕向ける」、「通俗図書館の創立時に学校内に置くのは止むを得ないが、なるべく速やかに分離する」、「学校への付設が取締上も経済上も便宜である場合には、公道に面する学校校内の一部に設立し、入口を学校と別にして開館時間中は民衆が自由に出入りできるようにし、さらに夜間は学校で取り締まるように設計するのが適当である」と述べている。

また、図書の選択収集について、伊東は「図書には民衆の読みたがる図書と図書館が閲覧させたい読者に有用有益な図書の2種があること」、「民衆に必要と認められる図書を備付けるとともに、民衆が現実希望する図書の準備も必要であり、図書の選択に関しては土地の状況、読者の種類、知識の程度、図書館の資力等を考慮する必要があること」を指摘している。そして、図書の選択方針としては次にあげる5項目を挙げている。

- 一、日常生活に必須の参考書
- 二、風教に裨益あるもの
- 三、民衆の読書趣味を促進するに適するもの
- 四、家庭の読みものに適するもの
- 五、地方の自治及び産業の発展に資するもの

伊東は「図書の選択は公平な態度で行い、各部類に涉って均等に備付け、紙質や印刷の良否、製本の強弱等を考えあわせて選択する」、「図書費の小額な小規模図書館ほど選択は緻密に行わなければならないので困難であること」を挙げている。さらに、図書の購入にあたっては、「図書館創立時に7から8割を各部類に振り分けて購入し、開館後に閲覧人の要求を観察した後に、残りの2から3割を購入する」、「土地の教育状態と読者の種類によって家庭用読物や農業書など実地に活用される図書の範囲から着手し、その後で他の部類のものを収集することも図書館の効用を比較的に速やかに知らせる上で効果的である」、「開館後も多量の図書を購入するのではなく、年数回あるいは各月数冊購入することで興味を喚起する」、「新刊書は発売数カ月後に価値が判明する場合もあるが、読者の閲覧時期を失ないように考慮しなければ

ならない」としている。

さらに、伊東は購入図書、寄贈書の選定や収集実務に関する具体的な手続については、「目録は図書館事務の遂行にとって、欠くべからざるものであり、通俗図書館ではカード式が便利である」、「分類法には和洋ともに種々の形式があり、今日多数の図書館が標準とするメルヴィル・デュエイの十進分類式を採用し、神奈川県内の分類法の統一のために刊行した分類表を参照する」、「図書の出納所は図書館が社会に対して接触する唯一の門戸である。図書の出納を敏捷に行うのみではなく、図書についての要求を全て引き受けて交渉し、質問応答に当るのでその責任は重大である」としている。

伊東が「伊東平蔵関係資料」の昭和3(1928)年1月17日の日誌の中で、自らが少々詰込みすぎと書いているように、講義内容は実務に即したかなり幅広いものになっている。

2. 府県立図書館の役割

伊東は、第21回全国図書館大会の協議会議題として「府県立図書館と大都市の市立図書館とは将来其機能を明確に区別する必要なきか」¹⁰¹⁾を提起している。伊東は、府県立図書館と市立図書館ではその設置趣旨及び性質が異なるため、所管主務の方針範囲を改変し、その真価を発揮し明瞭にすべきであるとしている。府県立図書館の特徴を明確化することは、府県立のみならず市立図書館の設立も間接的に促すことになる」と述べている。

- 一、府県立図書館は府県行政の参考府たらしめ同時に社会教育の重要中心機関として学校教育と併進せしむる目的に於て経営する事
- 二、府県立図書館には土木、教育、警察、産業其他広義に於ての府県行政に必要な参考書、府県行政の記録、府県の現状及び発達を徴し得べき一切の資料並びに府県民衆の智徳涵養に必須の図書を収集し之を参考部記録部産業部普通部に分つて夫々適当に整理する事

但し是等の各部には閲覧室又は閲覧席を設け閲覧及び調査研究をなし得らるゝ設備を施す事を要す

- 三、府県立図書館に於て受理したる寄贈書並に府県費を以て購入したる図書は管内所蔵庁署学校等における事務上又は教授上に常備の必要あるものを除き全て府県立図書館に於て保存する事
- 四、府県立図書館は館外貸出を本体として経営し管内各種の学校図書館及び希望者に一定の制限を設けて供給する事
- 五、府県立図書館は社会教育の中心機関たる立場よりして管内重要な都市に漸次分館を設置する事
- 六、府県立図書館は前項と同一の精神に於て管内公私立図書館の普及改善を促進する為め該図書館との関係連絡を緊密にし之を誘掖指導し無償を以て巡回文庫を貸付する事
- 七、府県立図書館は府県行政の参考機関たる方面よりして其本部を府県庁内又はその付近に設置する事

第21回全国図書館大会¹⁰²⁾においては、研究題及建議案として23項目があてられており、「府県立図書館と大都市の市立図書館とは将来其機能を明確に区別する必要なきか」はこのうちの第20項目にあたる。協議会の第2日目に当る昭和2(1927)年10月23日に、伊東は議案趣旨の説明を行った。

また、最晩年に図書館学講座に執筆した「小図書館の維持経営」¹⁰³⁾の中で、伊東は、図書館の規模の大小に拘らず、設立と同時に維持の方法を講じる必要があると指摘している。「大橋図書館や佐賀図書館のように維持財源が確保されている場合を除いて、私立図書館の運営は困難である。小図書館がその使命を果たすには、相当額の費用が必要である。しかし、図書館は図書さえあれば成立するというのは大きな錯誤であり、図書館員が必要であり、図書館当事者は有給又は相当の待遇をする必要があり、学校付設だからといって教職

員他に図書館事務を義務的に負担させるのは誤りである」と述べ、具体的に経費配分の私案を示している。伊東は大小を通じてその配分は同じで、人件費5割以上、図書費3割、事務費2割乃至1割5分が通例であるとしている。学校付設図書館については学校職員が兼務するので、幾分節約できる。物価高騰の折り、経費を切り詰めて1ヵ年で500円から600円を要すると主張している。この数値は岩手県町村図書館経営基準によって小学校1学級の経営費の半額を想定したとあり、100円未満では図書館たる対面や地位が保てず、効果を収めることは難しく、図書館の維持力の増大が目下の急務であると指摘している。

第7期の伊東は、神奈川県視察指導員を務めながら、神奈川県における図書館長になるべき人材養成のための講習会を実施している。伊藤伊太郎は『図書館雑誌』の「伊東平蔵先生を思ふ」¹⁰⁴⁾と題した追悼文の中で、伊東が佐賀図書館と横浜市図書館で館員に製本を学ばせ、製本職人の本職まで養成したという思い出に加えて、伊東が情に厚い人物であったことを回想している。

ここで着目すべきことは、伊東が業務内容に即した専門家の育成を目指しており、神奈川県図書館協会を設立したり、全国図書館大会において府県立図書館のあり方に関する問題提起を行い、さらに神奈川県図書館の組織化や府県立図書館の参考図書館化を積極的に推進していると考えられることである。

昭和3(1928)年5月6日に、日本図書館協会総了後に有志による晩餐会として、伊東の慰労会が開かれている¹⁰⁵⁾。この席上で伊東は図書館における過去の経験、特に横浜市図書館建設、関東大震災の罹災等の経験について次のように振り返っている。「自分は図書館の完成を目の前に引くのは残念だろうと尋ねられるが、後任があれば一つ所に永くいることはよくないと考えている」、「蚕が種をひりつけて歩くように方々へ動くのが自分の使命のように考えており、老体にはなったが、今日なお自分で出来ることであれば何時でも御用にしたい」と挨拶している。この言葉から図書館振興にかけた伊東の情熱は、最晩年

になっても衰えることがなかったことがわかる。

V. 伊東平蔵の図書館思想

A. 伊東平蔵が経営運営に関わった各図書館

伊東が実際に設立や経営に関わった6つの図書館について、図書、サービス、建物等の観点から比較するために作成したのが、付録2である。大日本教育会書籍館は『速記彙報』⁵²⁾、大橋図書館は『大橋図書館四十年史』³³⁾、佐賀図書館は『佐賀県立図書館六十年のあゆみ』¹⁵⁾、東京市立日比谷図書館は『東京市立日比谷図書館一覧』¹⁰⁶⁾、宮城県図書館は『宮城県図書館百年史』⁸⁰⁾、横浜市図書館は『横浜の本と文化』³⁾、『横浜市図書館報告』¹⁰⁷⁾、を参考にして作成した。

各図書館の蔵書冊数、閲覧人数、閲覧冊数は、伊東が設立や運営に関わった時期の数値を示した。伊東が明治20年代から昭和初年まで、その一生を通じて、設置母体の異なる多様な規模の図書館の設立運営に携わったことが分かる。6館のうち、最も規模が大きいのは、日比谷図書館である。日比谷図書館の蔵書数は、日英文庫の影響を受けて開館時の明治41(1908)年には125,343冊となっているが、このうち実際に利用可能だったのは、12,000冊あまりであったため、翌年の統計は41,096冊に修正されている。

宮城県立図書館については、明治40(1907)年に伊東が提出した図書館調査報告書での提案内容に基づいている。

図書館の建物についてみると、大日本教育会書籍館のみは平屋だが、それ以外の場合は、すべて本館は木造2階建以上で、書庫は耐火構造になっている。伊東は、図書館の建物は堅牢で実用的である必要があると主張しており、特に関東大震災以後はその経験を元に、耐震と耐火の重要性を指摘している。また、伊東は小さな図書館ほど、少ない図書館員で効率的な運営をする必要があるとしている。彼の関わった図書館の館員数は、日比谷図書館が最も多いが、どの図書館もそれほど多くの人数ではない。伊東は出納が多い図書館ほど書庫と出納台、事務室の動線には配慮しなければならないと考えていた。

各図書館のフロア構成を見ると、横浜市図書館以外は1階に事務室が設けられている。横浜市図書館だけが、事務室が2階に設定されているのは、敷地が斜面に位置しているためである。個々の図書館の立地条件に即した館内の閲覧室配置が行われたわけである。日比谷図書館、横浜市図書館、佐賀図書館には児童閲覧室が設けられ、事務室と同じフロアに配置されている。大橋図書館、日比谷図書館、横浜市図書館には、婦人閲覧室が見られるものの、佐賀図書館に婦人閲覧室がない。それは、2階閲覧室を衝立て男子と女子の座席に区切って、多目的な使用が行われていたからである。このように、建物の規模と使用用途に合わせた配慮や工夫が見られる。そこには、伊東の実務に裏付けられた合理的な図書館運営に対する考え方が存在する。

閲覧者の年齢制限については、大日本教育会書籍館には年齢制限がなく、日比谷図書館が7歳以上、それ以外は12歳以上となっている。まだ通俗図書館の規則が整っていなかった時期に、伊東が作成した大橋図書館の規程類は、多くの通俗図書館の参考にされたと考えられる。閲覧料金についても、大橋図書館が3銭でそれ以外は2銭に設定されている。東京市立図書館の閲覧料金を決めるにあたっては、大橋図書館の閲覧料金が参考にされた。東京市立日比谷図書館では、開館前に無料化が検討されたが実現しなかったものの、佐賀図書館では閲覧を無料化している。

次に図書を探すための目録についてみると、いずれもカード目録が用いられている。伊東は通俗図書館では、新刊書を出来る限り速やかに利用者に提供する必要があるとして、そのために差し替えが容易なカード目録が最適であると考えていた。そして、備付け目録については、和漢書の書名目録、分類目録、洋書の分類目録が必要であると指摘している。彼は、大日本教育会書籍館では利用促進のために、カード目録の他に『大日本教育会雑誌』に解題目録の掲載も行っている。また、大橋図書館では当初はカード目録を用いていたが、印刷目録を作成している。これらのことから、伊東がそれぞれの図書館現場での実践経験に

即して、常に図書館の規模に見合った整理体系をどうすべきかを追及していたことがわかる。

各図書館で用いられていた分類を比較するために作成したのが、第4表である。参考のために帝国図書館の分類¹⁰⁸⁾もあわせて示した。同時代でありながら、各図書館で異なった分類方式が用いられている。横浜市図書館で、伊東は図書の分類を検討し、デューイ式の十進分類法に基づいた「横浜市図書館和漢書分類表」を作成している。このことから、伊東が各図書館の利用を促進するには目録を整備し、利用者の使いやすい環境を整えることが重要であると考え、実践していたことがわかる。

第IV章でとりあげた各図書館の収集方針を比較するために、項目を配列しなおしたのが第5表である。右端は、伊東が神奈川県主催図書館講習会で指摘した通俗図書館として必要とされる内容である。読書趣味の涵養に適する図書は、全部の図書館に共通している。家庭の読み物について、通俗平易の図書の中に含めて考えているのか、佐賀図書館には項目が設けられていない。通俗図書館では、学生の自習用図書や学術技芸の研鑽に資すべき辞書及百科全書類の項目が見られない。いずれもその地方に関する図書、郷土資料の収集を重視している点は共通している。

B. 伊東の図書館に対する考え方

彼が残した著作や講演記録のうち、図書や雑誌に発表され、残されているものを一覧表に示したのが、第6表である。この表は、翻訳を除いた主な著作類について作成した。イタリア語関係の教科書等の発表は第4期で終り、第5期以後は図書館関係の論文や講演記録等が中心になる。

1. 小規模な通俗図書館の設立と利用促進

海外留学や通俗図書館の経営経験を積んだ伊東は、大規模な図書館を作るのではなく、小規模な通俗図書館を設立し、その利用促進を図る必要があると考えるようになった。

「大日本教育会書籍館」に関する談話⁵²⁾によると、経営難だった大日本教育会書籍館の経営を引

伊東平蔵とその実践的図書館思想

第4表 大橋、日比谷、佐賀、帝国図書館の分類表比較¹

	大橋図書館 佐賀図書館	日比谷図書館	宮城県立図書館	横浜市図書館	帝国図書館
第0門				総記	
第1門	書目、辞書、類書、 叢書、雑誌、新聞	事彙、叢書、随筆、 雑書	法律、政治、社会	神書、宗教	神書、宗教
第2門	宗教	宗教、哲学、教育	哲学、教育、宗教	哲学、教育	哲学、教育
第3門	哲学	文学、語学	文学、語学	法制、経済、兵事	文学、語学
第4門	法律、政治、軍事	歴史、伝記、地理、 紀行	歴史、伝記、地理、 紀行	社会、風俗、家事、 統計、植民	歴史、伝記、地理、紀行
第5門	社会（経済、財政、 統計、運輸、教育）	法律、政治、経済、 社会、統計	博物、理学、数学	文学、語学	国家、法律、経済、財政、 社会、統計学
第6門	文学、語学	数学、理学、医学	医学、工学、兵学	科学、数学、医学、 工学	数学、理学、医学
第7門	数学、理学、医学、 工学	工学、芸術、兵事	産業（農工商）	産業、交通	工学、兵事、美術、諸芸、 産業
第8門	産業（農業、工業、 商業）	産業、交通、家事	美術、音楽、遊戯	美術、諸芸、運動	類書、叢書、随筆、雑書、 雑誌、新聞紙
第9門	美術、諸芸		類書、叢書、随筆、 雑書	歴史、伝記、地誌	
第10門	歴史、伝記、地誌、 紀行		雑誌、新聞、官報、 県報		

¹ 出所：『大橋図書館四十年史』³³⁾、『佐賀県立図書館六十年の歩み』¹⁵⁾、『東京市立日比谷図書館一覧』¹⁰⁶⁾、『宮城県図書館百年史』⁸⁰⁾、『横浜の本と文化』³⁾、『横浜市図書館報告』¹⁰⁷⁾、『帝国図書館概覧』¹⁰⁸⁾より作成。

第5表 各図書館の収集方針比較

東京市立日比谷図書館 (明治39)	宮城県立図書館 (明治40)	佐賀図書館 (大正2)	通俗図書館 (昭和3)
出所： 備付図書選択標準（『時事新報』 記事 ⁷⁴⁾ ）	出所： 宮城県図書館に関する調査報告 書（『宮城県図書館百年史』 ⁸⁰⁾ ）	出所： 図書選択の標準（『佐賀県立図 書館六十年のあゆみ』 ¹⁵⁾ ）	出所： 図書館選択方針（『通俗図 書館の建設管理及経営』 ¹⁰⁰⁾ ）
・家庭の読物として適当なる図書	・家庭ノ読物タルト同時ニ読 書ノ趣味ヲ涵養スルニ適当 ノ図書		・家庭の読みものに適する もの
・読書の趣味を涵養するに適する 図書		・読書の趣味を増進なさしむ るに適する通俗平易の図書	・民衆の読書趣味を促進す るに適するもの
・一般学生の自修に資すべき図書	・学生ノ自習又ハ受験用ニ資 スベキ図書	・学生の自修に資すべき図書	
・東京市に関する図書	・本県及伊達家ノ沿革等ニ関 スル図書	・郷土に関する図書及報告書 の類	・地方の自治及び産業の発 展に資するもの
・実業に関する図書	・実業ニ関スル図書	・地方産業に関する図書	
・内外市政に関する図書			
・官公学校及公私団体の刊行書			
・市民の日常生活に必要な参考 図書	・県下一般ノ住民特ニ市民ノ 日常調査、参考及研学ニ必 須ナル図書		・日常生活に必須の参考書
・学術技芸の研鑽に資すべき辞書 及百科全書類	・個人ニテ得易カラザル字彙 及百科全書ノ類	・学術技芸の研鑽にしすべき 図書及百科全書の類	
・内外新聞雑誌を蒐集する事			
			・風教に裨益あるもの

第6表 伊東平蔵の著作と講演記録類

	タイトル	収録誌	発表, 発行年
第3期	『伊國信用組合』 ³⁸⁾ (著書)		明治 25 (1892)
	伊國百大家略伝	『伊学紀事』 第 4 号	明治 26 (1893)
	『伊語教授書』 ⁵³⁾ (著書 イタリア語教科書)		明治 28 (1895)
	マルコポーロ	『大日本教育会雑誌』 148 号	明治 27 (1894)
	大日本教育会書籍館 ⁵²⁾	『速記彙報』 58 号	明治 28 (1895)
第4期	通俗図書館 ⁶⁵⁾	『図書世界』 2 巻 4 号	明治 35 (1902)
	伊國圖書館令 ^{40)~43)} (解説と翻訳)	『図書世界』 3 巻 6 号~4 巻 3 号	明治 35 (1902)~ 36 年で中断
	『伊語読本』 ⁶¹⁾ (著書 イタリア語教科書)		明治 43 (1910)
第5期	地方図書館の設置に就て ⁸⁵⁾	『図書館雑誌』 19 号	大正 3 (1914)
	館外貸出に就いて ⁸⁶⁾	『図書館雑誌』 24 号	大正 4 (1915)
	図書館の利用法 ⁹⁰⁾	『図書館雑誌』 38 号	大正 8 (1919)
第6期	小図書館の建築 ⁹³⁾	『社会と教化』 2 巻 10 号	大正 11 (1922)
	公共図書館経営に関する感想片々 ⁹²⁾	『図書及図書館』 2 巻 1 号	大正 12 (1923)
	罹災図書館 ⁹⁴⁾	『図書館雑誌』 54 号	大正 12 (1923)
	図書館の建築に就て ⁹⁵⁾	『図書館雑誌』 72 号	大正 14 (1925)
	逸題 ⁹⁶⁾	『図書館雑誌』 80 号 (故総裁追悼記念号)	昭和 1 (1926)
第7期	横浜市図書館に就て ⁹⁷⁾	『図書館雑誌』 21 巻 9 号	昭和 2 (1927)
	府縣立図書館と大都市の市立図書館の将来其機能を明確に區別する必要なき ¹⁰¹⁾	『図書館雑誌』 21 巻 11 号	昭和 2 (1927)
	『通俗図書館の建設管理及経営』 ¹⁰⁰⁾ (講演記録)		昭和 3 (1928)
	廿年前に於ける我が國圖書館事業を顧みて ¹⁷⁾	『東京市立図書館と其事業』 48 号	昭和 3 (1928)
	小図書館の維持経営 ¹⁰³⁾	『図書館学講座』 第 2 巻	昭和 3 (1928)

き受けた伊東は、改革に乗り出している。彼は、通俗図書館に必要なのは、利用者への新刊書の速やかな提供であると考え、寄贈資料を中心とした資料収集を開始する。さらに、伊東は利用者と図書を結びつけるために、速やかに目録を整備する必要があると考え、寄贈により新刊書を収集し、カード目録、解題目録を作成するなど、利用のためのツールの整備に取り組んでいるのである。

また、大橋図書館の設立に際して、伊東は中流階級以下の人々を対象とした通俗図書館の建設が急務であること、東京市の面積と人口を考えると通俗図書館を所々に設立することが緊要であると主張している。彼は東京市立図書館の設立論議の中でも、小規模図書館を各区に1館ずつ設立する

という考え方を提案している。彼は、まず小規模の通俗図書館を設立して充実するという考え方を明治 30 年代から主張しているのである。

最晩年の第 7 期の「通俗図書館の建設管理及経営」¹⁰⁰⁾と題した文章の中でも、伊東は町村立図書館を設立できない地域に図書館を設立するには、小規模の図書館、若しくは文庫を作って、事業として成り立つ時期をみて町村立経営に移すことを提案している。図書館を使った経験の無い人々に、まず小規模図書館の利用経験をしてもらい、便利さを実感させるのである。この考え方は、まさに大日本教育会書籍館、大橋図書館という通俗図書館での経営経験に裏付けられた現実をふまえた伊東の考え方といえることができる。

さらに、伊東は建築した小図書館をいかに維持するかという点に着目し、「小図書館の維持経営」¹⁰³⁾では、図書館の規模に関わらず、図書館は設立と同時に維持が最大の課題となり、維持力の増強こそが必要であることを指摘している。伊東は、社会教育の中心となる通俗図書館として、安定した経営を維持するには公立図書館の発展こそが重要であると考えているのである。設立母体の異なる図書館での経験を積んだ上での伊東ならではの観点ということができよう。

2. 府県立図書館の機能の明確化

伊東は、第7期に「府県立図書館と大都市の市立図書館とは将来其機能を明確に区別する必要なきか」¹⁰¹⁾で、全国図書館大会の席上で府県立と市立図書館の区別の明確化を主張し、府県立の真価を発揮することの必要性を力説している。伊東は府県立図書館の特徴を明確化することが、市立図書館の設立をも間接的に促すことにも結びつくとしている。

彼は府県立図書館を府県行政の参考府、同時に社会教育の重要中心機関として位置づけ、府県立図書館では府県行政の記録、府県の現状に関する資料を集め、閲覧室又は閲覧席を設けて閲覧及び調査研究するための設備を充実する必要があると指摘している。府県立図書館に求められるのは、「社会教育の中心機関としての立場から県内に分館を設立すること」、「学校図書館との連携を行うこと、府県立図書館での保存機能、館外貸出機能を充実すること」であると伊東は述べている。

ここで伊東が府県立図書館に求めている機能は、中央図書館としての中央集権的機能や組織分担ではなく、参考調査機能を備えた府県立図書館を設立し、分館を設立し全県下に及ぶ広範囲なサービスを推進することである。明治40年代の宮城県立図書館の調査報告書の中で、伊東は既に府県立の参考図書館機能について言及している。また、佐賀図書館では当初から県立図書館への移管を想定した図書館の設立を推進している。伊東は、地方図書館でも将来唯一の中央図書館となる資格のものは、村落等に設置の通俗図書館とは異

なり、教育図書館と参考図書館の性質を備える必要があると考えていた。その上で、地方図書館の活性化という視点から、佐賀図書館では館外貸出の推進、利用促進に力を入れた。伊東は館外貸出を希望する人々に対しては、保証人や資格の有無にこだわらず、貸出を実施したいという積極的な姿勢を持っていた。それは伊東が館外貸出の促進を図ることで、図書館と社会を結びつけることができると考えていたからである。府県立図書館の機能を明確化すべきであるとする、こうした伊東の主張の背景には、宮城県立図書館や佐賀図書館での図書館経営で蓄積された図書館機能に対する考え方が見られるのである。

C. 図書館発展のための基盤形成

伊東は、図書館を各人の必要と趣味に従い、経済的自発的に学習できる教育機関であると位置づけている。そして、図書館設立の要素として、図書、図書館員、図書館建築をあげている。特に図書館員の育成については、早くから強い関心を示している。

1. 人材の育成

伊東は明治36(1903)年には大橋図書館において、日本文庫協会主催で日本初の図書館講習会を実施している。この講習に各機関から派遣され養成された人々は、その後の図書館界をリードする人材として活躍した。一方、最晩年の昭和3(1928)年1月には、神奈川県主催による図書館講習会においても、彼は館長レベルの人材を育成するための講習を担当している。第7表は、日本文庫協会主催と神奈川県主催の2つの講習会の内容を比較した表である。

受講対象者の範囲は、日本文庫協会の講習においては全国であり、神奈川県主催の研修では県内に限られている。受講者は、日本文庫協会の講習では現役の図書館員、教員等で図書館に関心のある幅広い人々が含まれている。神奈川県の講習の場合は、図書館長、町村長、学務委員等の実際に図書館を設置する立場にある人々が中心になっている。

第7表 図書館講習内容の比較¹

	図書館事項講習会	神奈川県主催図書館講習会
実施場所	大橋図書館	横浜市図書館
主催	日本文庫協会	神奈川県
実施期間	明治36(1903)年8月1日～14日	昭和3(1928)年1月15日～17日
日数	14日間	3日間
受講者	定員30名(応募54名, 修了37名) 大学図書館員, 公共図書館員, 師範学校教諭, 文庫書記, 視学等	28名 公私立図書館長, 町村長, 学務委員, 小学校, 女学校教員等
講習時間	1日平均3時間(推定42時間程度)	総時間 14時間
講習内容	図書館運営管理, 目録作成等の基礎と書誌学, 図書館史, 欧米事情等	基礎知識よりも実務を中心
講習科目数	正科9科目と実習, 科外講演8科目	5科目と実習

¹ 出所:『大橋図書館四十年史』³³⁾,『日本図書館協会五十年史』⁷⁰⁾,「神奈川県主催図書館講習会」⁹⁹⁾より作成

講習期間については、神奈川県の講習は日本文庫協会での講習の3分の1に短縮されて行われている。そのため、神奈川県の講習内容は実務中心に絞られており、理論的な部分はかなり省いた形で実施された。日本文庫協会の講習の講師陣は、当時日本文庫協会で活躍していた中心的人物であり、同時に各分野の実務に精通した人々が選ばれている。神奈川県の講習の場合は講師にもそれぞれ帝国、大橋、日比谷、浅草のいずれも各図書館長レベルで活躍している人々をそろえている。講習内容からみても、日本文庫協会の講習は、ある程度中長期的な人材の育成を重視している。神奈川県の講習では図書館設立を早期実現するために必要な実務的知識や具体的方法を、図書館を設置する立場の人々に短期間で教えようという意図が窺える。このように、それぞれの段階にあわせて、伊東が異なった目的を持った講習を設定していることは、多くの図書館の運営や経営に携わり、リーダー養成の必要性を痛感した結果と考えられる。

2. 日本図書館協会を通じた図書館界への貢献

伊東と日本図書館協会との関わりは、大日本教育会書籍館を経営していた頃、すなわち日本文庫協会の初期の時代から始まる。大正6(1917)年4月の『図書館雑誌』掲載の「日本図書館協会沿革略」¹⁰⁹⁾には、初期の頃からしばしば伊東の名前

が挙げられている。図書館事項講習会の開催を提唱し、第1回の会場として大橋図書館を提供するだけではなく、講義科目の検討等における主導的な役割をするとともに、自らも講師を担当している。第2回の講習会を推進する計画に携わり、さらに和田等とともに講習会の開催について文部省への建議を行っている。

明治39(1906)年に、伊東は初めての評議員選挙に当選している。佐賀図書館以後の伊東の活動は、九州での全国図書館大会の開催等、地方の図書館協会の活動の活性化へと発展し、大正6(1917)年日本図書館協会九州支部長に就任している。東京から佐賀へ、さらに横浜へと拠点を移しながらも、それぞれの地域で図書館の活性化の努力を継続していたと考えられる。伊東が各地域の実態に即した図書館の発展にとって、各地域における図書館員の育成と組織づくりが欠くことのできない要素であると考えていたからにほかならない。

VI. おわりに

伊東は常に「図書館とは何か」を問い続け、それを図書館員、図書館経営者、利用者など様々な視点からとらえ直している。既成概念にとらわれず、図書館を取り巻く環境や図書館の発展段階をふまえ、日々の実践の中で生まれる問題の解明に取り組んでいる。伊東が最晩年に提案した府県立

図書館、市町村立図書館の役割に対する指摘や図書館と社会を結ぶという考え方は、まさに、そうしたプロセスの繰り返しの中から形成されていた。伊東は、豊富な図書館の経営や運営経験に根ざし、きわめて実践的な理論を展開している。

伊東に関する先行研究が充分には進まなかった要因の1つに、伊東が一方で東京外国語学校のイタリア語教師を務めながら、一方で図書館長として活躍し、複数の分野で活動していた人物であることが挙げられる。各関係分野で個別の研究は行われてきたものの、それらの研究成果を、統合する形での研究が行われにくかったのである。

本研究では、各分野での伊東に関する先行研究を再構成し、横浜市中心図書館所蔵の「伊東平蔵関係資料」等の一次資料による研究も合わせながら考察を試みた。伊東の小規模通俗図書館経営についての考え方や府県立図書館の役割の明確化についての主張は、常にまさに実践的思想に裏付けられた考え方である。また、図書館員育成に専念する姿には、教育者として衰えることのない伊東の熱意を見る思いがした。

謝 辞

本稿執筆にあたり、伊東平蔵関係資料の閲覧および調査を許可して下さった、横浜市史料室久野淳一氏、横浜市中心図書館の皆様、ご指導いただいた慶應義塾大学文学部田村俊作教授に心より感謝いたします。

注・引用文献

- 1) 伊東平蔵逝く。図書館雑誌。1929, no. 114, p. 141.
- 2) 竹内愼. “先覚者の中の先覚者”. 図書館を育てた人々. 石井敦編. 日本図書館協会, 1983, p. 15-22.
- 3) 横浜市中心図書館開館記念誌編集委員会編. 横浜の本と文化. 横浜市中心図書館, 1994, 833p.
- 4) 横浜の本と文化 別冊. 横浜市中心図書館, 1994, 247p.
- 5) 伊東平蔵. [昭和3年] 日誌. (伊東平蔵関係資料 横浜市中心図書館).
- 6) 伊東平蔵. [昭和4年] 日誌. (伊東平蔵関係資料 横浜市中心図書館).
- 7) 備忘録. (伊東平蔵関係資料 横浜市中心図書館).

- 8) 大日本教育会会員章贈与証状. (伊東平蔵関係資料 横浜市中心図書館).
- 9) 今澤慈海. [伊東平蔵葬儀の弔辞]. (伊東平蔵関係資料 横浜市中心図書館).
- 10) “伊東平蔵 [告別式広告]”. 朝日新聞. 昭和4年5月3日朝刊, p. 11.
- 11) “伊東平蔵 [会葬御礼広告]”. 朝日新聞. 昭和4年5月5日夕刊, p. 2.
- 12) 栗田三吾. 伊太利亜語入門. 三省堂, 1940, 196p.
- 13) “伊東平蔵”. 海を越えた日本人名事典. 新訂増補, 日外アソシエーツ, 2005, p. 111.
- 14) 神奈川県図書館協会編. 神奈川県図書館史. 神奈川県立図書館, 1966, 472p.
- 15) 佐賀県立図書館六十年のあゆみ. 佐賀県立図書館, 1973, 326p.
- 16) 石山洋. 生涯四度図書館を創った男: 伊東平蔵. 日本古書通信. 2003, no. 883, p. 13.
- 17) 伊東平蔵. 廿年前に於ける我が國圖書館事業を顧みて. 東京市立図書館と其事業. 1928, no. 48, p. 4-9.
- 18) 佐光正二. 阿波洋学史の研究. 徳島県教育印刷, 2007, 812p.
- 19) 図書館人を偲ぶ座談会 (一). 図書館雑誌. 1941, vol. 35, no. 3, p. 162-174.
- 20) 是枝英子. 大橋佐平と大橋図書館. 大倉山論集. 2006, no. 52, p. 23-63.
- 21) 小河内芳子. 資料東京の図書館: 明治20年(1887)-昭和20年(1945). Library and Information Science. 1971, no. 9, p. 209-229.
- 22) 八里正. “大正時代の参考事務: 東京市立日比谷図書館”. 図書館と本の周辺. 1977, p. 127-131.
- 23) 嘱託東京市図書館開館準備主事 伊東平蔵 (進退冊 18-5 602.C.8.04 東京都公文書館).
- 24) 東京外国語学校沿革. 東京外国語学校, 1932, 111p.
- 25) 野中正孝. 東京外国語学校史: 外国語を学んだ人々. 不二出版, 2008, 1606p.
- 26) 国立教育研究所編. 明治前期文部省刊行雑誌総目録. 国立教育研究所, 1968, 205p., (日本近代教育百年史編集資料, 2).
- 27) 伊東平蔵. 図書館示諭事項: 四十五年前の文部省. 図書館雑誌. 1927, vol. 21, no. 1, p. 19-22.
- 28) 国立教育研究所第一研究部教育史料調査室編. 学事諮問会と文部省示諭. 国立教育研究所, 1979, 129p., (教育史資料, 1).
- 29) 伊藤稔明. 初等教育施策を中心としてみた1885年の文部省. 愛知県立大学児童教育学科論集. 2011, vol. 45, p. 1-21. <http://www.litaichi-pu.ac.jp/jk/zikyo45ito.pdf>. (参照 2011-12-08).
- 30) 文部省職員録: 明治20年12月. 文部省, 1887, 98p. <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/780309/44>. (参照 2011-12-08).

- 31) 文部省職員録：明治23年12月。文部省，1890，137p.
- 32) “蜂須賀茂韶”。大日本人名辞書。vol. 3, 大日本人名辞書刊行会，1937, p. 2098.
- 33) 坪谷善四郎編。大橋図書館四十年史。博文館，1942, 347p.
- 34) 石井元章。ヴェネツィアと日本：美術をめぐる交流。ブリュッケ，1999, 315p.
- 35) 東京外国語学校教授伊東平蔵外一名同上（陸地測量師榎江順依願免本官ノ件）（任免裁可書・大正2年・任免巻8 国立公文書館）。
- 36) 長沼守敬。現代美術の揺籃時代。中央公論，1936, no. 584, p. 214-244.
- 37) チシアンは、ヴェネツィア絵画の黄金時代に画壇の支配的地位にあった、画家ティツィアーノ・ヴェチェリオ（Tiziano Vecellio; 1488/90-1576）であろう。ティツィアーノは、英語ではTitianと呼ばれ、日本語で表記するにあたって、音の近いチシアンが用いられたものと考えられる。“ティツィアーノ・ヴェチェリオ”。オックスフォード西洋美術事典。講談社，1989, p. 671-673.
- 38) 伊東平蔵。伊國信用組合：一名・共同庶民銀行。東京伊学協会，1892, 73p.
- 39) 当時のイタリアでは養蚕業が発達し、紡績業が重要な産業の一つであった。北イタリアで蚕の伝染病が発生して、イタリアからインドにいたる広い地域に流行した。イタリアが1860年代に健康な蚕種を供給できる場所を求めてたどり着いたのが、開国したばかりの日本であった。1866年から1875年のイタリアでの需要が最大であった時期には、日本の蚕種輸出量の3分の2ないし4分の3をイタリア向けが占め、活発な交易やイタリア人による日本研究も行われていた。カーロリ，ローザ。“第2部第1章：イタリアにおける日本研究の歴史・現状・課題”。[ニッポン学]の現在。角川学芸出版，2008, p. 183-193.
- 40) 伊東は、イタリアでは古来から文学美術が旺盛で、図書館も各都市に散在している、この図書館令は十有数年前の発布だが、如何に多くの図書館を統轄して厳粛かつ周到に管理しているのか、参考資料として訳出して掲載するとその掲載理由を述べている。伊東平蔵。伊國圖書館令。図書世界，1902, vol. 3, no. 6, p. 44-48.
- 41) 伊東平蔵。伊國圖書館令。図書世界，1903, vol. 4, no. 1, p. 24-27.
- 42) 伊東平蔵。伊國圖書館令。図書世界，1903, vol. 4, no. 2, p. 5-8.
- 43) 伊東平蔵。伊國圖書館令。図書世界，1903, vol. 4, no. 3, p. 5.
- 44) イタリアでは17世紀に各地の諸侯が競って図書館を建設し，18，19世紀には自館のコレクションを守り続けた。ほとんどは非公開で，利用者サービスよりも蔵書の保存に力を入れていた。1861年の国家統一後に行われた公教育省の調査では，図書館数は世界一であり，総計400万冊の蔵書を持っていた。しかし，個々の図書館の蔵書はそれほど大きくはなかった。藤野幸雄。“イタリア”。世界の図書館百科。日外アソシエーツ，2006, p. 50-51.
- 45) Sandra, da Conturbia. “Italy”. Encyclopedia of library history. Garland Pub., 1994, p. 309-315. (Garland reference library of social science, 503).
- 46) 19世紀後半イタリアにおける通俗図書館は，1861年にプラトで初めて設立され，1868年には140館，1893年には1,272館であった。1908年の調査によれば，町村立415館，市立133館，個人113館，工場8館，労働団体80館，宗教団体15館で全蔵書数752,050冊に達している。伊東が留学した明治21（1888）年頃は，通俗図書館の増加した時期にあたる。イタリア留学が伊東の図書館に関する活動と思想に与えた影響については，現時点では確証を得ていないため，今後の課題としたい。和田萬吉。図書館史。芸艸会，1936, 379p. (芸艸会叢書)。
- 47) 伊東平蔵。大日本教育会雑誌：号外。1889, no. 1, p. 265.
- 48) 松田道一，渡辺直達編。伊学協会日誌。日伊協会，1942, 132p.
- 49) 奥泉和久。“第4章：通俗図書館の成立と展開”。公共図書館サービス・運動の歴史1：そのルーツから戦後にかけて。日本図書館協会，2006, p. 92-133. (JLA 図書館実践シリーズ，4)。
- 50) 千代田図書館八十年史。千代田区，1968, 337p.
- 51) 穂積重行。「伊学協会」をめぐって：明治20-30年代。日伊文化研究，1985, no. 23, p. 99-127.
- 52) 伊東平蔵。大日本教育会書籍館。速記彙報，1895, no. 58, p. 154-155.
- 53) 伊東平蔵。伊語教授書。伊学協会，1895, 50p.
- 54) 依田学海。学海日録。vol. 8。岩波書店，1991, 389p.
- 55) 依田学海。学海日録。vol. 9。岩波書店，1991, 391p.
- 56) 伊東が「伊太利国皇帝陛下」と履歷書に記しているのは，1878年から1900年まで在位し，三国同盟の成立に協力し，批准したイタリア王のウンベルト（Umberto）1世（1844-1900）と考えられる。“ウンベルト”。岩波西洋人名辞典。増補版，岩波書店，1981, p. 239.
- 57) 伊東平蔵伊国衛生記章受領及佩用ノ件（叙勲裁可書・明治31年・叙勲巻8 国立公文書館）
- 58) 和田萬吉。創立當時の協会。図書館雑誌，1928, vol. 22, no. 3, p. 57-67.
- 59) “美術音楽両校の伊学科”。朝日新聞。明治35年

- 3月18日朝刊, p.1.
- 60) 東京外国語大学史編纂委員会. 東京外国語大学史. 東京外国語大学, 1999, 1491p.
- 61) 伊東平蔵. 伊語読本. 伊東平蔵, 1910, 65p.
- 62) 有島生馬. 思い出の我. 中央公論美術出版. 1976, 395p.
- 63) “伊太利人の日本語文法書”. 朝日新聞. 明治24年4月24日朝刊, p.2.
- 64) 加茂町立図書館後援会編. 水哉坪谷善四郎先生傳. 加茂町, 加茂町立図書館後援会, 1949, 257p.
- 65) 伊東平蔵. 通俗図書館. 図書世界. 1902, vol.2, no.4, p.1-2.
- 66) “博文館主大橋佐平翁逸事”. 国民新聞. 明治34年11月10日 (新聞集成図書館 第1巻: 明治編 (上), p.72-73.)
- 67) 指令送付按 (大橋図書館設立者大橋新太郎より財団法人設立願に付指令, 他) (一件態・3件) (第一種・文書類纂・学事・第23類・雑件・1巻625.C2.04 東京都公文書館).
- 68) 赤堀又次郎は国語学者の大家として知られ, 反町茂雄と交流があった。反町は, その著書『一古書肆の思い出』の中で, 赤堀とのはがきのやり取りが昭和15 (1940) 年に途絶えてしまい, 終戦直後に赤堀夫人が反町を訪ねてきて死去を知ったと記し, このことから赤堀が第二次世界大戦中に死去したと考えられるとしている。反町茂雄. 賈人 wait 侍者. 平凡社, 1986, 469p., (一古書肆の思い出, 2).
- 69) “図書館事項講習会”. 朝日新聞. 明治36年6月2日朝刊, p.3.
- 70) 樋口龍太郎. 日本図書館協会五十年史. 日本図書館協会, 1989, 156p., (日本図書館協会百年史資料, 4).
- 71) 片山信太郎. 明治に生れたる図書館の追憶. 社会と教化. 1922, vol.2, no.9, p.10-18.
- 72) 吉田昭子. 東京市立日比谷図書館構想と設立経過: 論議から開館まで. Library and Information Science. 2010, no.64, p.135-175.
- 73) 東京市立図書館一覧. 大正15年版. [東京市立日比谷図書館], 1926, 31p.
- 74) “日比谷図書館”. 時事新報. 明治39年11月22日 (新聞集成図書館 第1巻: 明治編 (上), p.379.)
- 75) “第二図書館と建築費”. 日本. 明治39年12月1日 (新聞集成図書館 第1巻: 明治編 (上), p.381.)
- 76) 187号請願聴許の件 日英図書館の義に付文学博士高楠順次郎 (市会・普通議案・冊18-5 602. B6.16 東京都公文書館)
- 77) 東京都公立図書館長協議会編. 東京都公立図書館略史: 1872-1968. 東京都立日比谷図書館, 1969, 193p.
- 78) 市立日比谷図書館開館式. 東京市教育会雑誌. 1908, no.51, p.45-47.
- 79) 5月30日嘱託中勤務に依り金300円贈与す 元日比谷図書館事務嘱託 伊東平蔵 (第1種 秘書進退六 命令 賞罰の部 602.A1.10 東京都公文書館).
- 80) 宮城県図書館百年史: 1881-1981. 宮城県図書館, 1984, 181p.
- 81) 宮城県立図書館の改築落成. 図書館雑誌 1913, no.17, p.32.
- 82) “本縣書籍館の新方針”. 河北新報. 明治41年6月3日 (新聞集成図書館 第2巻: 明治編 (下), p.130.)
- 83) 伊東平蔵君並に錦織精之進君の退官. 図書館雑誌. 1913, no.17, p.41.
- 84) “沿革略”. 佐賀図書館年報. 1927, no.13, p.1-3.
- 85) 伊東平蔵. 地方図書館の設置に就て. 図書館雑誌. 1914, no.19, p.39-41.
- 86) 伊東平蔵. 館外貸出に就いて. 図書館雑誌. 1915, no.24, p.41-44.
- 87) 楠田五郎太. 動く園ノ研究 (上). 園研究. 1934, vol.7, no.3, p.275-288. (園研究複製版, 8).
- 88) 西村謙三. 縣へ移管されたる佐賀図書館の十五年. 図書館雑誌. 1929, no.117, p.229-231.
- 89) 今澤慈海. “図書館の発達は九州が第一”. 朝日新聞. 大正4年6月21日朝刊, p.5.
- 90) 伊東平蔵. 図書館の利用法. 図書館雑誌. 1919, no.38, p.16-20.
- 91) 島房吉. 伊東平蔵君の残したる業績. 図書館雑誌. 1927, vol.21, no.3, p.103.
- 92) 伊東平蔵. 公共図書館経営に関する感想片々. 図書及図書館. 1923, vol.2, no.1, p.10-14.
- 93) 伊東平蔵. 小図書館の建築. 社会と教化. 1922, vol.2, no.10, p.62-66.
- 94) 伊東平蔵. 罹災図書館. 図書館雑誌. 1923, no.54, p.12-14.
- 95) 伊東平蔵. 図書館の建築に就て. 図書館雑誌. 1925, no.72, p.10-12.
- 96) 伊東平蔵. 逸題. 図書館雑誌. 1926, no.80, p.3.
- 97) 伊東平蔵. 横濱市図書館に就て. 図書館雑誌. 1927, vol.21, no.9, p.282-284.
- 98) 図書館員指導. 図書館雑誌. 1927, vol.21, no.5, p.173.
- 99) 神奈川縣主催図書館講習会. 図書館雑誌. 1928, vol.22, no.2, p.39.
- 100) 伊東平蔵. 通俗図書館の建設管理及経営. 伊東平蔵, [1962], 41p.
- 101) 伊東平蔵. 府縣立図書館と大都市の市立図書館とは将来其機能を明確に區別する必要なきか. 図書館雑誌. 1927, vol.21, no.11, p.322-323.
- 102) 第二十一回日本全国図書館協会大会. 図書館雑誌. 1927, vol.21, no.11, p.323-328.

- 103) 伊東平蔵. “小圖書館の維持經營”. 図書館学講座. vol. 2. 図書館事業研究会, 1928, p. 13-18.
- 104) 伊藤伊太郎. 伊東平蔵先生を思ふ. 図書館雑誌. 1929, no. 117, p. 230-231.
- 105) 晩餐会. 図書館雑誌. 1927, vol. 21, no. 5, p. 175-178.
- 106) 東京市立日比谷図書館一覧. 東京市立日比谷図書館, 1908-1914, 6冊.
- 107) 横浜市図書館編. 横浜市圖書館報告: 大正 10-13 年. 横浜市図書館, 1924, 21p.
- 108) 帝國圖書館概覽. 帝国図書館, 1906, 9p.
- 109) 日本図書館協会沿革略附會員氏名録. 図書館雑誌. 1917, no. 30, 87p.

要 旨

【目的】 伊東平蔵 (1857 ～ 1929) は、明治末期から昭和初期の日本の図書館界で、図書館設立に精通した人物として知られている。彼は東京外国語学校の教授を務め、一方で多くの図書館設立建設準備にあたった。しかし、彼に関する先行研究は充分に行われてきたとはいえない。本研究の目的は、伊東平蔵の人物像と、実践の中で培われた図書館思想を明らかにすることである。

【方法】 伊東の経歴を明らかにするために、先行研究で用いられた資料や公刊された資料類の調査を実施した。さらに横浜市中央図書館が所蔵している伊東の資料（日記、書簡類の複製）や、東京都公文書館等の一次資料の調査を行った。彼の図書館思想については、公刊された伊東の論文などから再構成した。

【結果】 伊東の生涯を 7 つの時期に分けて検討を行った。彼は東京に市立図書館がなかった時代に、市民のための通俗図書館の設立運営にあたった。伊東は私立図書館、市立図書館、県立図書館と性格の異なる図書館を設立し、その運営に当る一方、人材育成を通じて図書館界の基盤の必要性を唱え、その整備と内容充実に力を注いだ。こうした実践の中で、彼の考え方は、小規模な図書館を数多く設立することから、図書館の通俗性を維持しながらも自治体の規模にあった図書館を設立すること、さらに府立図書館や県立図書館と市町村立の図書館の役割分担が重要であることへと展開していった。

伊東平蔵とその実践的図書館思想

付録1 伊東平蔵経歴略年表

	年号	西暦	年齢	伊東平蔵関連事項	図書館界の動向
第1期	安政 3	1857		12月21日に阿波（現徳島県）藩士山内俊一三男として誕生し、後に同藩伊東八郎左衛門養子となる	文部省が東京書籍館を開館（明治8年5月） 東京書籍館を東京府所属へ（明治10年2月）
	明治 7	1874	18	東京外国語学校でフランス語を学ぶ	
第2期	明治 13	1880	24	文部八等属報告局勤務（9月）	東京府書籍館を、文部省所轄とし、東京図書館と改称（明治13年7月） 大日本教育会付属書籍館一ツ橋通町に設置（明治20年3月） 大日本教育会付属書籍館神田区柳原河岸に移り開館（明治20年7月）
	明治 15	1882	26	文部七等属専門学務局兼務、「図書館示諭事項」を起草	
	明治 18	1885	29	東京図書館兼務	
	明治 19	1886	30	文部六等属。渡航（イタリアへ私費留学）	
	明治 21	1888	32	伊学協会会員認定（12月）	
	明治 22	1889	33	イタリアから帰国	
第3期	明治 23	1890	34	大日本教育会会員章贈与賞状（5月）	大日本教育会付属書籍館書庫新築落成式（明治24年9月） 日本文庫協会創立（明治25年3月） 大日本教育会付属書籍館改築落成式（明治26年7月） 帝国図書館官制制定（明治30年4月） 市制特例廃止（明治31年） 図書館令制定（明治32年11月）
	明治 25	1892	36	依田学海二女琴柱と結婚（2月） 『伊國信用組合』 ³⁸⁾ 刊行（伊学協会事務所は東京市本郷区伊東方）	
	明治 26	1893	37	大日本教育会書籍館の経営にあたる（7月）	
	明治 30	1897	41	陸軍通訳生、参謀本部付。陸軍省依願免本官（12月）	
	明治 32	1899	43	東京外国語学校伊語科設置、講師囑託（9月10日）	
第4期	明治 33	1900	44	東京外国語学校教授就任（9月28日）、東京市教育会調査部伊東等の図書館設置案作成提案。（11月） 日本文庫協会例会で「大日本教育会図書館に就きて」を講演（明治34年11月）	東京市教育会創設（明治33年7月）
	明治 35	1902	46	大橋図書館主事（6月） 日本文庫協会例会で「大橋図書館創立以来の概況」を講演（明治35年11月）	大橋図書館開館（明治35年6月）
	明治 36	1903	47	図書館事項講習会開催（日本文庫協会主催於大橋図書館）（8月）	日比谷公園が開園（明治36年6月） 日露戦争（明治37年2月～明治38年9月）
	明治 38	1905	49	東京市教育課に図書館設計案や図書館建設調査委員設置を提案	戸野周二郎東京市教育課長に就任
	明治 39	1906	50	日本図書館協会初の評議員選挙に当選（3月） 大橋図書館から東京市立図書館準備のため主事に転任（9月10日）	帝国図書館新築落成、開館式（明治39年3月） 東京市立図書館調査経費370円決議、通俗図書館設置場所を日比谷図書館公園に確定（同年4月） 東京市日比谷図書館と命名（明治39年10月）、文部大臣より日比谷図書館設置認可（明治39年11月） 東京市立日比谷図書館に改称（明治39年12月）

付録1 つづき

	年号	西暦	年齢	伊東平蔵関連事項	図書館界の動向
第4期	明治 40	1907	51	日本文庫協会評議員に留任（3月） 日本文庫協会例会で「東京市日比谷図書館創立経営談」を講演（6月） 図書館事項講習会についての建議案を起草し、市島日本文庫協会会長等と文部省に建議書を提出（7～9月） 宮城県知事宛に「宮城県立図書館に関する調査報告書」提出（10月）	高楠順次郎により日英文庫東京市へ寄託請願（明治40年9月） 日英文庫受入決定（明治40年10月） 東京外国語学校より日英文庫図書受領 東京市立日比谷図書館開館準備に渡邊又次郎を嘱託（同年11月）
	明治 41	1908	52	日比谷図書館事務を嘱託（3月） 依頼で嘱託を解く（5月） 全国図書館大会で、「通俗図書館の経営」を講演（11月）	東京市立日比谷図書館処務規程制定（明治41年1月） 日本文庫協会が日本図書館協会と改称（明治41年3月） 渡邊又次郎日比谷図書館主事就任（明治41年3月）、日比谷図書館建物落成（同年9月）、開館（同年11月） 文部省開催図書館事項夏季講習会開催（明治41年7月27日～8月7日）
第5期	大正 2	1913	57	佐賀図書館創立委員委嘱（1月） 東京外国語学校教授退職（3月）	佐賀図書館落成（大正2年11月）
	大正 3	1914	58	佐賀図書館副館長就任（1月） 佐賀図書館開館（2月）	第1回九州図書館連合大会開催、私立佐賀図書館巡回文庫開始（大正3年11月） 東京市立図書館機構改革により、日比谷図書館を中央図書館とする東京市立図書館網の形成（大正4年3月） 東京市立図書館同盟貸付開始（大正4年5月）
	大正 6	1917	61	佐賀図書館長就任（10月）、日本図書館協会九州支部長就任（11月）	
	大正 9	1920	64	佐賀図書館長辞任（3月） 横浜市図書館建設事務所主任（4月）	
第6期	大正 10	1921	65	横浜市図書館初代館長就任	文部省図書館員教習所開設（大正10年6月）
	大正 12	1923	67	関東大震災により灰燼に帰した横浜市図書館を復興	関東大震災により、東京帝国大学図書館、大橋図書館、東京市立図書館、横浜市図書館等罹災（大正12年9月）
	大正 14	1925	69	横浜市図書課長就任	日本図書館協会「府県立図書館設置に関する決議」（大正13年6月）
	昭和 1	1926	70	横浜市図書館退職（12月）	
第7期	昭和 2	1927	71	第21回全国図書館大会協議会に「府県立図書館と大都市の市立図書館とは将来其機能を明確に區別する必要なきか」 ¹⁰¹⁾ を提出	横浜市図書館新館落成（昭和2年8月） 神奈川県学務部『和漢図書十分法分類表』編制（昭和3年1月）
	昭和 3	1928	72	神奈川県主催図書館講習会を開催（1月） 神奈川県図書館指導員、満州朝鮮旅行（8月～9月） 東京市立日比谷図書館20周年記念講演（10月29日） ¹⁷⁾	神奈川県図書館協会設立（昭和3年3月） 鍋島家佐賀図書館終了（昭和4年3月） 県立佐賀図書館設立（昭和4年4月）
	昭和 4	1929	73	5月2日死去、5月4日告別式（今澤慈海弔辞）、墓所鶴見総持寺	

伊東平蔵とその実践的図書館思想

付録2 各図書館の規模等の比較¹

	大日本教育会 書籍館	大橋図書館	日比谷図書館	宮城県立図書館 (伊東提案)	佐賀図書館	横浜市図書館
設置母体	私立 大日本教育会	私立 大橋家	市立 東京市	県立 宮城県	私立(鍋島家)→ 県への移管を前提	市立 横浜市
開館	明治20年3月	明治35年6月	明治41年11月	明治14年7月 (宮城県書籍館 開館) 40年4月に改称	大正3年2月	大正10年6月 設立
伊藤平蔵が 経営等に直 接関わった 時期	明治26年7月～ 28年 (主幹)	明治35年6月19 日～39年9月 (主事)	明治39年9月10 日～41年3月 (主事) 明治41年3月～ 5月 (事務嘱託)	明治40年10月 4日報告書提出 (嘱託として調 査)	大正2年1月 (創立委員) 大正3年2月～ 6年10月 (副館長) 大正6年10月～ 9年3月 (館長)	大正9年4月～ (主任) 大正10年6月～ (館長) 大正14年1月～ (図書課長) 昭和元年12月 退職
蔵書数	24,140冊 (明治26年)	44,510冊 (明治35年)	125,343冊 (明治41年) 41,096冊 (明治42年)	(明治40年の 蔵書数 51,764冊)	5,301冊 (大正3年)	6,974冊 (大正13年)
閲覧人数	21,524人 (明治26年)	67,551人 (明治35年)	21,045人 (明治41年 11～12月) 188,895人 (明治42年)	(明治40年の 閲覧人数 133,844人)	68,014人 (大正3年)	10,444人 (大正13年)
図書館員	7名 (明治26年)	19名 (明治36年)	20名 (明治41年)	明治40年の 現員6名+ 司書2名増	10名 (大正3年)	9名 (大正13年)
建築坪数	木造平屋 (93坪) 洋式書庫 (21坪)	木造2階 (111坪48合) 煉瓦造3階建書庫 (3層24坪)	木造2階 (209坪6合5 勺) 煉瓦造書庫 (4層27坪9合 8勺)	木造2階 (80坪) 煉瓦造書庫 (2層50坪)	木造2階 (118.5坪) 煉瓦造書庫 (3層15坪)	鉄筋コンクリート 3階 (561坪) 書庫 (4層38坪)
フロア 構成	閲覧所、事務室、 製本所	1階(新聞閲覧 室、事務室、製 本室、小使室、 便所) 2階(普通閲覧 室、婦人室、記 念室)	1階(新聞雑誌閱 覧室、児童閲覧 室、休憩室、婦 人閲覧室、事務 室、応接室、製 本室、小使室) 2階(閲覧室、特 別閲覧室、会議 室)	内訳なし	1階(新聞室、迎 賓室、事務室、 閲覧人休憩室、 製本室、少年 室) 2階(閲覧室)	1階(新聞雑誌 室、休憩室、製 本室) 2階(玄関、広 間、事務室、婦 人閲覧室、児童 閲覧室) 3階(目録室、特 別閲覧室、普通 閲覧室)

¹ 出所:『大日本教育会書籍館』(『速記彙報』⁵²⁾),『大橋図書館四十年史』³³⁾,『東京市立日比谷図書館一覧』¹⁰⁶⁾,『佐賀県立図書館六十年のあゆみ』¹⁵⁾,『宮城県図書館百年史』⁸⁰⁾,『横浜の本と文化』³⁾,『横浜市図書館報告』¹⁰⁷⁾より作成。